

四国大学紀要, (A) 41: 113–147, 2013  
 Bull. Shikoku Univ. (A) 41: 113–147, 2013

## 『万葉集』の副助詞ノミ

### ——基本義〈収縮的単一性〉指定の試み——

田中敏生

【論文概要】万葉集から副助詞ノミの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈収縮的単一性〉に求めるといふ観点から、この語のふるまい方を記述する。その際、ノミの附属する成分ごとに検討を施すとともに、特にこの基本的意義のよく見て取られる場合についても指目する。それによって、この意義が総ての用例において一貫して發揮されているありさまを明らかにする。併せて、中古ノミへの遷り変わりにについても、些かの見通しが述べられる。

【キーワード】万葉集 副助詞 ノミ 収縮的単一性 局時的語性 汎時的語性

#### はじめに

本稿は、万葉集から副助詞ノミの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈収縮的単一性〉に求めるといふ観点から、その使われ方の記述を試みるものである。

周知のように、万葉集にあつて限定表現を担うのはもっぱらノミであつた。万葉集中にノミが約百九十例見えるのに対して、バカリは約三十例にとどまり、しかもその大半は「かくばかり」の形をとつて程度用法に用いられている。限定用法は、辛うじて《捕ふばかりを（執許乎）》（二・二九四三）の例がそれに数えられるかといった状況である。

しかし、中古になるとバカリにも限定用法が生じ、ノミとの間に一種の役割分担がなされるに至る。その中身については夙く『あゆひ抄』に説が見える。ノミが「かた一さうなる心」を表わすのに対して、バカリは「二

つ三つに及ばぬ心」において限定を施すというのがそれである（文献<sup>28</sup>、二四〇頁）。現代風に言えば、ノミによる限定が「もっぱら・ひたすら」といった口気を伴う密度濃いものであるのに対して、バカリによるそれは「僅かに」といったふうな、些少性・局限性の意味を帯びたものであるということになろう（注<sup>①</sup>）。

このような推移を頭に置くと、万葉集のノミが中古と同じ意味を表わしていたと考えることは難しい。一方にバカリがあつてこそ、ノミによる密度濃い限定ということもまた独自の役割を担うが、ノミが限定表現を一手に引き受けるという状況にあつては、そういつもいつも密度濃い限定ばかりしているわけにもゆかないだろうからである。そして現に、万葉のノミには次のような事象が見られる。

- i ダニとの共存例があること（第二節で扱う）
- ii スラとの共存例があること（第三・四節で扱う）

iii 譲歩的なモノとの共存例があること（第一・二・四節で扱う）

iv カラニとの共存例があること（第四節で扱う）

v 文末用法が見られること（第五節で扱う）

これらは、ノミが、集中性というよりも寧ろ「僅かさ」の意味あいの色濃く帯びていたであろうことを示唆すると言えよう。どちらかと言えば、中古のバカリに近いあり方を示す事象ではないかと推測されるわけである。

ノミによる限定に、必要な事項の欠如のもとに些少な事項を示すといった場合が見られることも、そうした見方を促すであろう。

この、上代のノミに固有のあり方をより精しく捉えるために、本稿では、ノミの基本的性質として〈収縮的単一性〉の意義を立てようとする。ノミがある文中で用いられるとき、この語の接する項目内容が、自分自身の中に縮こまるかのように狭く限られたものであることを、自身の意義において示すと考えられるわけである。この基本的性質を仮説的に想定しつつ、それが間違ひなく見出されるかどうかを万葉集の総ての用例について検討してゆことが、本稿の課題である（注②）。

以下では、万葉集のノミ凡そ百八十八例を、その附属する成分の種類によつて次のように分けた上で見てゆくが、そのことはまた自ずから、中古のノミへの遷り変わりについて、その見通しを考えることにもなるであろう。

- |                  |            |
|------------------|------------|
| (1) 主格成分と関わるもの   | 三七例        |
| (2) 対格成分と関わるもの   | 三八例        |
| (3) ニ格の成分と関わるもの  | 三三例        |
|                  | (ニノミ二例を含む) |
| (4) 連用諸成分と関わるもの  | 五六例        |
| (5) 述語成分と関わるもの   | 二三例        |
| (6) 連体修飾成分と関わるもの | 一例         |

（総計 一八八例）

## 一 主格成分と関わるもの

主格成分と関わるノミは、万葉集中に凡そ三十七例見える。これは大きく次の二つに分けておくことができる。

(a) 一般の主述関係をなすもの 二一例

(b) 特に「音のみし泣かゆ」の形を取るもの 一六例

第一に、(a) 一般の主述関係をなすものについては、さらに次の二つに分けておくのが便宜かと思われる。

イ…ヒトが主語となるもの 九例

ロ…ヒト以外のものが主語となるもの 一二例

まず、イ…ヒトが主語となるものとしては、次のような例を挙げることでできる。

- ① (一〇五・〇八九二) 日月は 明しといへど 我がためは 照りや給はぬ 人皆か 我のみや然る (吾耳也之可流)
- ② (一一五・三六二四) 我のみや (和札乃未夜 夜船は漕ぐと思へれば沖辺の方に梶の音すなり
- ③④ (一一三・三三二九) 我のみかも (妾耳鴨) 君に恋ふらむ 我のみかも (吾耳鴨) 君に恋ふれば
- ⑤ (一〇四・〇六五六) 我のみそ (吾耳曾) 君には恋ふるわが背子が恋ふと言ふことは言のなくさそ
- ⑥ (一一〇・一九八六) 我のみや (吾耳哉) かく恋すらむかきつはたにつらふ妹はいにかあるらむ
- ⑦ (一〇六・〇九一三) 夕されば かはづ鳴くなり 紐解かぬ 旅にしあれば 我のみして (吾耳為而) 清き川原を 見らくし惜しも
- ⑧ (一一四・三四二二) 伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど我が恋のみし (安我古非能未思) 時なかりけり
- ⑨ (一〇八・一四六一) 昼は咲き夜は恋ひ寝る合飲木の花君のみ見や(君

耳将見哉）戯奴さへに見よ

このうち、①～④では、「世界の中で一人だけ」を取り出すのにノミが用いられている。

①は、貧窮問答歌の「答」の始まり部分である。「人皆―我」といった対照の中で「自分ひとり」を取り出して示すのにノミが用いられている。こんな不如意な思いに苦しんでいるのは世界中で自分一人なのではないかと疑い懼れているわけである。広大な人間界の広がりの中から僅かに一点だけを取り出してくる場所に、「自分自身の中に縮こまるように狭く範囲を限る」というこの語の性質がよく見て取れるのではないかと思われる。そこから不遇な境涯に踟躇することにおける孤絶感もまた表わされるに至るわけである。

②は、遣新羅使の船出の歌である。「我のみ」は「自分らだけ」（澤瀉）「我らだけ」（新大系）といったふうに複数で訳されているが、夜の海の広大な広がりの中での孤立性を詠み込んでいることは疑いなかろう。だからこそ、他にも船を漕ぐ人がいることに無量の安堵を感じることにもなるわけである。そうした意味で、①と同様のあり方を認めることができる。ノミはいわば、欠如の海に浮かぶ孤島のような寂寥感を表わしていると言える。

③④は長歌による挽歌群の一首であり、夫に先立たれた妻の気持ちを詠んでいる。ここでもノミは、「世界中で私ひとりだけが」といった意味合いを表わすのに用いられている。これまた（収縮的単一性）の意義のよく見て取られる例だと言えよう。

他方⑤～⑦では、我と汝との対の中で「我」を取り出すのにノミが用いられている。このような場合も、「我と汝」がそろってこそ十全に世界が形成されることを考えるならば、これまでの例と同じように捉えることができるのではないかと思われる。

⑤は、大伴の坂上の郎女が詠んだ歌である（相手は不明）。「私のほうだ

けがあなたを恋慕しているのです。あなたのほうでも恋慕しているというのは、ただのリップサービスです」との歌意である。一人の相手に対して総ての思いを捧げている人間にとって、相手がその思いに応えてくれないことは孤絶というに等しい。「我のみ」は、そのような「たった二人の世の中」での疎外されたありかたを表わす言い方であり、そうした点に、この語に固有の意義のはたらくありさまを認めることができるであろう。

⑥も同様である。草に寄せる相聞の歌であるが、我と君とが世界の総てであるような関係にあつて、「君」に相手にされないことは、世界の喪失にも等しく、そうした孤立への疑懼の念を表わすのにノミが用いられていると言えよう。

⑦は、養老七（七二三）年の夏、吉野の離宮に行幸があつたときに、車持の千年が詠んだ長歌の一節である。この清らかな景色をたった一人だけで見るのが惜しいと歌っている。行幸先では、土地を褒めることと望郷の思いとが詠まれるとされる（伊藤積注）。そうした意味で、ここでのノミも⑤⑥に準じて考えることができる。（「我のみして」は形としては手段格だが、実質的には主格とも見なしうるので、ここで扱っておいた）

残る⑧⑨にあつても、ノミ自体については、これまでと同様のあり方を認めることができる。

⑧は、上野の国の歌である。そこに住む人にとって伊香保の山から吹き下ろす風は、日々体験するごくありふれたものであつたに違いない。いわば日常性を代表するものとして受け止めることができよう。その中で、ただ自分の恋の思いだけは止む時を見ない。そんな意味あいを表わすのがここでの「我が恋のみし」であろう。日常性の中でのたった一つの例外を表わすのに（収縮的単一性）の意義が働いているわけである（「我が恋」は直接ヒトを指すものではないが、ヒトと密接不可分な思いを表しているため、便宜ここで扱うことにした）。

⑨は紀女郎が家持に贈った歌である。「君」は女郎自身を、「わけ」は家

持を、それぞれ諧謔的に指すとされる（文献③）。「ご主人さま一人だけなどということでは余りに少なすぎる。ぜひともお前も見なさい」といったふうな意味を表わすのに、ノミが用いられている。「君」だけであることが極めて不十分なものであることを示すことにおいて、そうした意味を形作るのだと言えよう。

次に、ロ・ヒト以外のものが主語になるものとしては、次のような例が挙げられる。

〔言のみ・名のみ〕

①②（〇三・〇四三二）奥つ城を こことは聞けど 真木の葉や 茂り  
たるらむ 松が根や 遠く久しき 言のみも（言耳毛） 名のみも我  
は（名耳母吾者） 忘らゆましじ

③（二一・二七〇八）しなが鳥猪名山とよに行く水の名のみ寄そりし（名  
耳所縁之） 隠り妻はも

④（一一・二七〇八一云）しなが鳥猪名山とよに行く水の名のみ寄そり  
て（名耳所縁而） 恋ひつつやあらむ

〔心のみ〕

⑤（〇四・〇五四六）言問はむ よしのなければ 心のみ（情耳） む  
せつつあるに 天地の 神言寄せて

〔袖のみ〕

⑥（〇七・一三九二）紫の名高の浦の砂地袖のみ触れて（袖耳触而） 寝  
ずかなりなむ

〔花のみ〕

⑦（〇二・〇一〇二）玉葛花のみ咲きて（花耳開而） 成らざるは誰が恋  
ならめ我は恋ひ思ふを

⑧（〇七・一三五八）はしきやし我家の毛桃本繁み花のみ咲きて（花耳  
開而） 成らざらめやも

⑨（〇七・一二六四）見まく欲り恋ひつつ待ちし秋萩は花のみ咲きて（花

耳開而） 成らずかもあらむ

⑩（〇八・一六二九）高円の 山にも野にも うち行きて 遊び歩けど  
花のみし（花耳） にほひてあれば

⑪（一九・四一五六）あらたまの 年行き変はり 春されば 花のみに  
ほふ（花耳保布） あしひきの 山下とよみ

〔塩気のみ〕

⑫（〇二・〇一六二）いかさまに 思ほしめせか 神風の 伊勢の国は  
沖つ藻も なみたる波に 塩気のみ（塩気能味） かをれる国に う

まこり あやにともしき 高照らす 日の皇子

このうち①④では、「言」「名」といった語句に接していることが注意されよう。これらはいずれも現実・実体といった実質的な部分に対する二次的・間接的な側面を表わす言葉だからである。

わけても①②は、譲歩的な意味を表わす「も」とともに用いられている点で重要かと思われる。赤人が真間の手児名の墓を通り過ぎた時に詠まれた長歌の後半部分である（注③）。この辺りが墓だとは聞いているものの、実際には鬱蒼と繁る木々しか目に入らない。そんな実体の見えない中で、「話だけでも 名前だけでも 忘れることができそうにない」と締め括っている。

「も」はその用いられ方によってさまざまな意味を表わすことになるであろうが、次のような例のあることを考えれば、譲歩的な意味を表わす場合のあることは十分に認められてよいと思われる。

・（一九・四二〇三）家に行きて何を語らむあしひきの山ほととぎす一

声も鳴け（一音毛奈家）

家持らが布勢の大海を遊覧したときに、久米広縄の詠んだ歌である。「一声だけでも鳴いてくれ」の意であり、ダニによる「最低願望」（文献⑬）の場合にも似た意味を表わすに至っていると受け止められよう（注④）。

①②の「も」もまた、これと同じ使われ方をしていると解してよからう。

「奥つ城」を目の当たりにすることができれば感慨もひとしお深からうが、その叶わない今の状況下でもこの哀話は十分に人の心をつづつものであり、その話だけでも、名前だけでも、心に刻み込まれて消えないというのが、「のみも」によってもたらされる意味あいであろうからである。最善の状態から大きく引き下がったものでしかないながらも、やはりそこには捨てるに惜しい価値のあることを述べている。ノミが、自分自身の内に縮こまるかのように範圍を狭く限るものであるからこそ、そうした譲歩的な意味もまた十全に形作られるのだと言えよう。

③④ではもはや譲歩的な「も」は現われず、「名」だけであることを言うのにノミが用いられている。③は川に寄せる寄物陳思の歌、④はその異伝歌である。ここでの「名」は「噂・風聞」の意であり、そうした語にノミが接することによって、評判だけに終わった関係が哀惜され、あるいはそうなることへの予覚が詠嘆的に述べられる。実質を伴わない部分へと範圍を狭く限るところに、ノミの特質の遺憾なく發揮されているありさまが見て取れよう。

次に、⑤～⑨のような例では、枢要な事柄の欠けていることを示す言葉とともに用いられている点が注目されよう。

⑤は、笠金村が行きずりの女を手に入れたことを喜ぶ長歌の一節である。この部分では、コンタクトが取れなくて悶々としていた状態を述べている。《言問はむ よしのなければ》とあるように、外界に対してなんら積極的な働きかけをなすことができず、ただ自分の内側の世界に閉ざされているほかない状態である。「心のみ」は、そのような逼塞性を表わす云い方である。現実から隔てられ、単なる物思いの世界へと閉じ込められたあり方を表わす点に、この語の基本的性格がよく現われ出ていると言えよう（注⑤）。

⑥は、「浦のまなご」に寄せる恋の歌である。（袖が触れる―共寝をする）という対の中でノミの用いられている点が注目されよう。もとより大切な

のは後者のほうであって、前者はただかその準備段階にあるに過ぎない。ノミは、そのような要素を取り出すのに用いられている。いわば、枢要的な他項の欠如のもとに、辺縁的な一項が示されるのであって（注⑥）、そうしたあり方において〈収縮的単一性〉の意義が發揮されていると考えられよう。

⑦は、巨勢郎女が同伴安麻呂に答えた歌である（注⑦）。ここでもノミは、「花が咲く―実が成る」という対の中で用いられている。右と同様、肝心な要素の欠落のもと、せいぜいその「へり」に位置する要素だけしか見出せないことが表わされている。ノミが、自分自身のうちに小さく収まり込むように僅かなあり方を表わすものであるからこそ、そうしたありようもまた明瞭に示されるのだと言えよう。

⑧⑨についても同様である。⑧は花に寄せる譬喩歌、⑨は木に寄せる譬喩歌である。ここでも、枢要的な他項の欠如のもとで辺縁的な一項を示すのにノミの用いられているさまが見て取れよう。

さらに⑩～⑫のような例でも、右とはやや異なるものの、類似の事情を観察することができる。

⑩は、大伴家持が坂上大嬢に贈った歌である。天平十二年（七四〇年）秋ごろの詠かとされる（伊藤積注）。恋しさを紛らすために山や野に出て行くが、もとより大嬢に逢えるはずもなく、ただ花だけが咲き匂っている。そんな意味合いを詠み込んだ部分である。《思ふ人の姿は見えず、花ばかりが美しく咲いてゐるので、の意》（澤瀉注釈、二八一頁）とされる。「花」はいわば、「大嬢の非在」を視覚的に提示するはたらきを担ったものと受け止めることができる。求めるものがなんら見当たらない、その蕭条たる不在を体现する具象物である。枢要的な他項の欠如という点では右の⑥や⑦⑨と共通するが、辺縁的な一項が特にその欠如を具象化する役割を担う点で、これまでとはやや異なるあり方を見せているかと思われる。ここでは、〈収縮的単一性〉の意義もまた、そのような形ではたらいっていると捉



えることができる。

⑪についても、右に準じて考えることができる。天平勝宝二年（七五〇年）、家持が鵜飼について詠んだ長歌の一節である。ここでも、花以外になんら耳目を引くものがないといった意味で読むことができそうに思われる。そう読むことで、直前の鷹狩りの長歌に見えた《語り放け 見放くる人目 ともしみと 思ひし繁し》といった流寓の情の残響を聞くことができるであろうし、そこから、後段に述べられた、形見の衣を濡らすのも厭わないほどの鵜飼への愛着もまた、その根柢に潜む心情において了解することができるのではないかと考えられるからである（注⑧）。

⑫も同様である。天武天皇没後に持統天皇（太上天皇）が夢の中で詠んだ長歌の一節であり、伊勢の国のありさまを描いている。ここでの「塩気」も、右の「花」と同様、「非在の具象化」という役割を担っているのではないかと考えられる。澤瀉氏の注釈が《藻の靡いてゐる波に潮気の立ち煙るばかりの土地に》と解し《「潮気のみかをれる」といふやうな、うらさびた表現》と評するように（注⑨）、都にあつては当たり前にあるもののおよそ見当たらないありさまが、感覚的要素に身を借りて具象化されているわけである（注⑩）。ここでのノミは、そうした意味で、必要な要素の欠如を髣髴たらしめるものとしての辺縁的一項を示すのに用いられていると言えよう。

こうして、（a）の一般的主述関係をなすものにあつてノミは、その主語項目の自身が極めて限られたものでしかないことを示すのに働いていることが知られるであろう。そうした点に、《収縮的単一性》の意義の發揮されるありさまが見て取られるのではないかと考えられるわけである。

第二に、（b）「音のみし泣かゆ」の形を取るものは十六例見える。この種の言い方は、現実に対してなすすべもなく無力な状態にあることの、その所作的な現実態の表現として受け止めてよいのではないかと思われる。先の「花のみ」や「塩気のみ」が非在の感覚面での具象化とも言うべき役

割を帯びていたように、「音のみし泣かゆ」もまた、積極的な行為から閉ざされてあることの所作面での具象化といった意味あいを担っているのであつて、そうしたあり方において《収縮的単一性》の意義が發揮されていると考えることができるであろう。

次の①～⑦のような例では、とりわけそのことがよく見て取れる。なすすべのない状況や無力な状態そのことが、何らかの形で言葉に表わされているからである（それぞれ破線および波線を施した）。

①（〇三・〇四五六）君に恋ひいたもすべなみ蘆鶴の音のみし泣かゆ（哭耳所泣）朝夕にして

②（〇五・〇八九七）かにかくに 思ひ煩ひ 音のみし泣かゆ（祢能尾志奈可由）

③（〇五・〇八九八）慰むる心はなしに雲隠り鳴き行く鳥の音のみし泣かゆ（祢能尾志奈可由）

④（一三・三三四四）いづくにか 君がまさむと 天雲の 行きのまにまに 射ゆししの 行きも死なむと 思へども 道の知らねば ひとり居て 君に恋ふるに 音のみし泣かゆ（哭耳思所泣）

⑤（〇四・〇六四五）白たへの袖別るべき日を近み心にむせひ音のみし泣かゆ（哭耳四所泣）

⑥（一五・三六二七）玉の浦に 船をとどめて 浜びより 浦磯を見つ 泣く子なす 音のみし泣かゆ（祢能末之奈可由）

⑦（〇四・〇五〇九）我妹子に 恋ひつつをれば 明け晩れの 朝霧の 鳴く鶴の 音のみし泣かゆ（哭耳之所哭）

①は、天平三年（七三二年）七月、大伴旅人が亡くなったときに、資人・余明軍が詠んだ歌である。尊崇する主人を喪った遣りようのない悲しみになすすべも知らず、ただ泣き声だけが湧き出てくるに任せるほかない——そんな圧ししがれたありようを表わすのがこの云い方であろう。《ただ蘆べの鶴のように打ちしおれて泣くばかりだ》（中西進）との訳文は這

般の消息をよく汲み取ったものと思われる。そうであってこそ「いたすべなみ」という無力さの表明ともよく合致するからである。蓋し「泣き声」とは方途に窮した果てに行き着く生理現象であり、我が身に生じうることならをそのようなものへと狭く限るところから、右のような意味あいもまた生じてくると考えられるであろう。

②は老身に病を加えて辛苦する思いを詠み込んだ憶良の長歌の末尾部分である。あれやこれやと思ひ煩うことばかりで出口は見えず、ただ泣き声だけがこみ上げてくるに過ぎない……。ここでの「音のみし泣かゆ」は、そんなうちひしがれた状態を表わすものと言えよう。③はその反歌であり、「雲隠り鳴き行く鳥の」の部分には、どちらを向いても活路の見出せない境遇が譬喩的に託されているさまを見て取ることができる。同様にして、赴任中の夫の突然の訃報を聞いて詠まれた④や、紀女郎が怨恨を詠んだ⑤にあっても、どうするすべもないまま、こみ上げてくる鳴咽に身を委ねているありさまが浮かび上がってこよう。

⑥は遣新羅使の属物発思の長歌の一節である。難波津から淡路島・敏馬・明石の浦・家島と囑目の景を辿って、今は玉の浦に船を泊めている。そこからあたりを見渡すと、家恋しさをどうすることもできず、ただ泣きじやくる子どものように泣き声だけがこみ上げてくる。そんな遣る瀬ない旅愁に沈み込むありさまを表わすのが、ここでの「音のみし泣かゆ」であろう。「泣く子なす」もまた、そうした無力な状態の譬喩的な形象化と受け止めることができる。

⑦は、丹比の笠麻呂が筑紫に下るときに詠んだ長歌の一節である（右の⑥はこの歌に依拠しているのではないかとの議論もなされている。伊藤釈注、第八冊・一〇四頁）。ここはまだ難波津で陸地との別れを惜しむ部分である。妻恋しさになすすべもなく、ただ泣き声に我が身を委ねている。そんなうち萎れたありさまの表現として「音のみし泣かゆ」が用いられていると言えよう。だからこそ「朝霧こもり 鳴く鶴の」といった心象化も

またなされるわけである。

次の⑧以下の例では、もはや右のような語句は伴なわれないが、これらにあっても、「音のみし泣かゆ」という言い方自体は、これまでと同様に考えることができるであろう。

⑧（二〇・二三〇） なにしかも もとなとぶらふ 聞けば 音のみし泣かゆ（泣耳師所哭） 語れば 心ぞ痛き

⑨（三〇・三三四） 見るごとに 音のみし泣かゆ（哭耳所泣） 古思へば

⑩（二〇・四四八〇） 恐きや天の御門をかけつれば音のみし泣かゆ（祢能未之奈加由） 朝夕にして

⑪（二〇・四五一〇） 大君の継ぎて見すらし高円の野辺見るごとに音のみし泣かゆ（祢能未之奈加由）

⑫（〇九・一八一〇） 葦屋の菟原処女の奥つ城を行き来と見れば音のみし泣かゆ（哭耳之所泣）

⑬（一三・三三一四） 己夫し 徒歩より行けば 見るごとに 音のみし泣かゆ（哭耳之所泣） そこ思ふに 心し痛し

⑭（一九・四二一五） 遠音にも君が嘆くと聞きつれば音のみし泣かゆ（哭耳所泣） 相思ふ我は

⑮（一五・三七三二） あかねさす昼は物思ひぬばたまの夜はすがらに音のみし泣かゆ（祢能未之奈加由）

⑯（二七・四〇〇八） 見渡せば 卯の花山の ほととぎす 音のみし泣かゆ（祢能未之奈加由） 朝霧の 乱るる心 言に出でて 言はばゆ

ゆし

⑧は霊亀元年（七一五年）、志貴の親王が薨ぜられたときの挽歌の一節である。高円山に燃える火について尋ねたところ、そんなことを聞かないでほしいと哀願するかのような答えが返ってきた。志貴の親王の葬送の松明だったからである。そんなことを尋ねられると一度に悲しみが増して、

ただ泣き声だけが思わず知らずのうちに進り出てくる。そのような、うちひしがれた無力な状態を表わすのが、この常套句とも言える「音のみし泣かゆ」の言い方だと考えられよう。

⑨以下にあっても同様である。⑨は神岳に登って赤人の詠んだ長歌の末尾部分、⑩は天平勝宝八年（七五六年）十一月二十三日、池主の邸で酒宴が設けられたときに大原今城が披露した古歌（作者未詳）、⑪は天平宝字二年（七五八年）二月、中臣の清麻呂の邸で宴を張ったときに高円寺の離宮に思いを馳せて詠まれた甘南備真人伊香（伊香王）の歌、⑫は菟原処女の墓をめぐる長歌に添えられた反歌である。これらにあっても、⑨天武・持統の盛時を思い遣つての哀愁や⑩畏れ多い大君のことを心に懸けての悲しみに埋もれ、あるいは、⑪聖武天皇の御代を偲ぶ懐旧の念（仲麻呂政権下で不遇をかこつ思いも潜むとされる）や⑫かつての哀話への共感の心情に浸ることによって、僅かに泣き声だけがこみ上げてくるのに任せるほかにありさまが詠み込まれている。

また、⑬は夫が馬を持たないことに心痛める妻の歌、⑭は天平勝宝二年（七五〇年）五月二十七日、仲麻呂の二男が慈母を喪つたのを弔う挽歌の反歌、⑮は越前に流された中臣宅守が狭野弟上娘子を想う歌、⑯は天平十九年（七四七年）五月二日、家持が奈良へ旅立つのを惜しむ池主の長歌の一節である。これらにあっても、それぞれに、自己の心情にうち沈み、自失のままに嗚咽流涕するありさまが歌われていると言えよう。

こうして、(b)「音のみし泣かゆ」の形を取るものにあつて、ノミは、我が身に生ずる事柄を「泣き声」という僅かなものへと狭く限ることによつて、なすすべもない無力な状態を表わすのに働いていると考えることができるであらう。

以上の検討から、主格成分と関わるノミは、(a)(b)の双方を通じて、自身の接する項目内容の僅かなありようを表わすものであることが知られよう。そのような形で〈収縮的単一性〉の意義の發揮されているさまを觀

察することができるわけである。

## 二 対格成分と関わるもの

対格成分と関わるノミは、凡そ三十八例見える。主格成分の場合と同様、ここでも次の二つに分けておくことができる。

(a) 一般の対格成分と関わるもの 二四例

(b) 特に「音をのみし泣く」の形を取るもの 一四例

第一に、(a) 一般の対格成分と関わるものは二十四例である。このうち特に注目されるのは、「目のみだに」の形でダ二とともに用いられた例の見られることである。

① (〇七・一二一) 妹があたり今そ我が行く目のみだに (目耳谷) 我に見えこそ言問はずとも

右は羈旅の歌のうち、妹背山を詠んだ五首のうちの一首である。「妹があたり」は、実景としては妹山のあたりを指す。「目」は逢うことの意であり、《顔だけでも自分に見せておくれ。物は云はなくとも》(澤瀉注釈)の意となる。ここでのダ二は、自身の接する語句が軽少な要素であることを示しつつ(注①)、希求表現と共存することによって、「せめてもの願い」を表わすものとなっている。所謂「最低限願望」(文獻⑬)の用法である。集中、巻四には「目言をだにも」の言い方が見える(六八九)。「目言」(≡逢つて語らうこと)の組み合わせでも既に軽少な要因であることが知られるが、この歌ではそこからさらに「言」を差し引いて、「目」だけになっている。ノミもまた、そのような要素への収縮性を示すことで、交会の僅かではないありさまを表わし、ひいては譲歩的な願望の表現へと向けて、ダ二との積極的な協同をはたし得ているのだと考えられよう。

右以外の例は、次のように細分することができる。それらを見渡すと、多くが実質部分を欠いた二次的・間接的な側面を表わす語句に接している



ことが知られる。以下、この点に留意しながら用例を見て行く。

- イ…音のみ 七例
- ロ…名のみ 七例
- ハ…言のみ 二例
- ニ…その他 七例

(計 二三例)

まず、イ…「音のみ」の形を取るものは次の七例である。ここでのノミは、対象との関わり方が間接的なものでしかないことを表わすのに用いられている。

- ① (〇二・〇一九六) 音のみ (音耳母) 名のみも絶えず 天地の  
いや遠長く 偲ひ行かむ
- ② (一七・四〇〇〇) 万代の 語らひぐさと いまだ見ぬ 人にも告げ  
む 音のみ (於登能未毛) 名のみも聞きて ともしぶるがね
- ③ (〇二・〇二〇七) 梓弓 音に聞きて 言はむすべ せむすべ知らに  
音のみを (声耳乎) 聞きてありえねば
- ④ (〇二・〇二〇七) 梓弓 音に聞きて 「一に云ふ、「音のみ聞きて」  
(声耳聞而) 言はむすべ せむすべ知らに
- ⑤ (〇六・〇九一三) うまこり あやにともしく 鳴る神の 音のみ聞  
きし (音耳聞師) み吉野の 真木立つ山ゆ
- ⑥ (〇七・一〇九二) 鳴る神の音のみ聞きし (音耳聞) 卷向の檜原の山  
を今日見つるかも
- ⑦ (一一・二八一〇) 音のみを (音耳乎) 聞きてや恋ひむまを鏡直目に  
逢ひて恋ひまぐもいたく

このうち①②では、譲歩的な意味を表わす「も」とともに用いられている点が注目されよう。

①は明日香皇女の死を悼む人麻呂長歌の一節である。《せめて皇女のお噂ばかりでも御名ばかりでも絶えずに偲び行かう》(澤瀉注釈)との思い

を詠み込んでいる。主格成分の場合にも見られたように、ここでも「も」とともに用いられている。それによって「皇女がご健在でいらしやるのが何よりだけれども、それが叶わないならばせめてものことに」といった、譲歩性を帯びた意味あい表わされることになる。ノミが「音」という二次的ではない要素へと向けて縮こまるかのように範囲を狭く限るものであるからこそ、「も」とのそのような協同もまた可能になるのだと考えられよう。また②は、天平十九年(七四七年)、越中在任中の家持の詠んだ「立山の賦」の結びの部分である。《その評判だけでも、名だけでも聞いて珍らしがり心惹かれるやうに》(澤瀉注釈)の意であり、①と同様のあり方が看取されよう。

③以下では、もはやそのような「も」は伴なわれず、対象との繋がり方の稀薄なありさまを表わすのにノミが用いられている。

③は、妻の死を泣血哀慟する人麻呂長歌の一節である。ここは訃報を告げられてじっとしていられないことを詠んでいる。「その報せだけを聞いて何もせずにいるわけにはゆかないので」の意であろう。妻の近況をめぐる知り方が、間接的ではないものへと狭く限られるありさまが見て取れよう(新大系では「ねのみを」と訓まれているが、諸注に鑑み、「おと」として扱うことにした)。④は、③の「二云」の部分である。ここでもノミは同様のはたらき方をしていると見えよう。

⑤は、車持の千年が吉野を詠んだ長歌の冒頭部分である。ただ噂だけ聞いていた吉野の山から実際に見下ろしてみるとの意であり、このあと、その清らかな河原のありさまが描出される。ノミは、已往の経験が間接的なものでしかないことを示すことによって、実体験でこそ得られる賞嘆のゆるぎなさを実感させるのに役立っていると言えよう。檜原の山を実見して詠まれた⑥についても同様である。

⑦は問答歌の「問」の歌である。「実際に逢うとあとの恋しさが激しいので、いっそのこと噂だけを聞いて恋い焦がれることにしようか」との意

である。繋がり稀薄でしかない状態を取って選り取ることを表わすのにノミが用いられていると言えよう（なお、この歌への「答」に「照れる月夜も闇のみに見つ」の言い回しが見える。次節（a）の⑩として掲げる）。

次に、ロ…「名のみ」の形のもは次の七例である。

- ①（二・二〇一九六）音のみも 名のみも絶えず（名耳毛不絶） 天地のいや遠長く 偲ひ行かむ
- ②（二七・四〇〇〇）いまだ見ぬ 人にも告げむ 音のみも 名のみも聞きて（名能未母伎吉氏） ともしぶるがね
- ③（二二・三二三五）近くあれば名のみも聞きて（名耳毛聞而） 慰めつ今夜ゆ恋のいや増さりなむ
- ④（〇五・〇八六八）松浦がた佐用姫の児が領巾振りし山の名のみや（夜麻能名乃尾夜） 聞きつつ居らむ
- ⑤（〇六・〇九六三）大汝 少彦名の 神こそば 名付けそめけめ 名のみを（名耳乎） 名児山と負ひて 我が恋の 千重の一重も 慰めなくに
- ⑥（一七・四〇一一）狂れたる 醜つ翁の 言だにも 我には告げずとの曇り 雨の降る日を 鳥狩すと 名のみを告りて（名乃未乎能里弓）
- ⑦（二・二〇二〇七）或る本には、これを「名のみを（名耳） 聞きてありえねば」と謂へる句あり

このうち①～③では、先の場合と同様、譲歩的な意味を表わす「も」との共存が見られる。①は、明日香皇女の死を悼む人麻呂長歌の一節、②は立山の賦の一節である。挽歌と讃歌との違いはあるものの、どちらもノミは、「名」という、実体からすれば二次的な派生物であるに過ぎないものへと縮こまるかのように範囲を狭く限るのに用いられている。それが「も」と組み合わせることによって、譲歩性の意味あいを形作ることになるわけである。③の驛旅発思の歌にあっても、類似の事情が見て取れよう。「今

までは近くにいたので、逢えなくても噂だけでも聞いて慰めていた」の意であって、ノミは、繋がり方が間接的であるに過ぎないものへと範囲を狭く限ることによって、それがせめてもの慰めの具であったことを表わすにも至るわけである。

④以下の例では、ノミはもはや譲歩的な意味あいとは関わらず、「名」というものの実質を欠いたありかたそのことを表わすのに用いられている。

④は、天平二年（七三〇年）七月十一日、松浦巡行に加われなかった憶良が思いを述べて旅人に献上した歌である。《山を見る事が出来ずに、その名だけを聞きつ、過すことであらうか》（澤瀉注釈）の意とされる。名勝との稀薄な関わり方に甘んぜざるを得ないことを表わす点において、ノミは、行楽から取り残された憶良の心情をよく担い得ていると言えよう。

また⑤は、天平二年十一月、坂上の郎女（旅人の異母妹）が筑紫から奈良へ帰る時に名児山で詠んだ長歌の全文、⑥は、天平十九年（七四七年）九月二十六日、逃げた鷹を夢に見て喜んだ家持の詠んだ長歌の一節である。⑤では「なご（む）」というのが単に名前だけにとどまることだが、⑥では鷹獵に行くという断わりがほんの形だけでしかなかったことが、それぞれ述べられている。内実を伴わない空疎なあり方を表わすのにノミの特質のよく活かされているありさまが見て取れよう。

⑦は、人麻呂泣血哀慟歌の末尾に見える注記であり、先の「音のみを聞きてありえねば」の部分をめぐる異伝ではないかとされる。この形の場合も、ノミのはたき方自体は先のイ・③と同じであろう。

また、ハ…「言のみ」の形を取るものとして次の二例が挙げられる。  
①（〇四・〇七四〇）言のみを（事耳乎）のちも逢はむとねもころに我を頼めて逢はざらむかも

②（二二・三一一三）ありありて後も逢はむと言のみを（言耳乎）堅く言ひつつ逢ふとはなしに

①は坂上の大嬢が《後瀬の山の後も逢はむ君》(七三七)と詠みかけてきたのに答えた家持の歌、②は問答歌の「問」の歌である。どちらも、口先だけ上手に言って実の伴わないことへの疑懼や恨みの思いが詠み込まれている。「言」という、それ自体としては符牒に過ぎないものへと範圍を狭く限ることに於いて、そうした意味あいが形作られていると言えよう。

〔標のみ〕

①(一〇三・〇四一四) あしひきの岩根こしみ菅の根を引かば難みと標のみぞ結ふ(標耳曾結焉)

〔心のみ〕

②(一四・三五三八) 広橋を馬越しがねて心のみ(己許呂能未) 妹がり遣りて我はここにして

〔かかふのみ〕

③(一〇五・〇八九二) 綿もなき 布肩衣の 海松のごと わわけ下がれる かかふのみ(可々布能尾) 肩にうち掛け 伏廬の 曲廬の内に直土に 藁解き敷きて

〔すべもなき恋のみ〕

④(一五・三七六八) このころは君を思ふとすべもなき恋のみしつ(古非能未之都々) 音のみしそ泣く

〔乱れ恋のみ〕

⑤(一一・二四七四) 山菅の乱れ恋のみ(乱恋耳) せしめつつ逢はぬ妹かも年は経につつ

〔人なぶりのみ〕

⑥(一五・三七五八) さす竹の大宮人は今もかも人なぶりのみ(比等奈夫理能未) 好みたるらむ

〔花のみ〕

⑦(二〇・四四四七) 略しつづ君が生ほせるなでしこが花のみ訪はむ(波奈乃未等波無) 君ならなくに

①は家持の詠んだ譬喩歌である。菅の根を女性に喩えている。周りがあるさいので約束だけに留めた意であろう。代用表象とも言うべき、ほんの「しるし」でしかないものへと範圍を狭く限ることに於いて、相手との繋がりの実を欠いたありさまが表わされていると言えよう。

②は駒に寄せて詠まれた国名不詳の相聞歌である。相手のもとに馳せるものが、生身の自分はさて置いて僅かに心だけであることが歌われている。そうした屏息性を表わすのに、この語の基本的意義のよく活かされているさまが見て取れよう。

③は貧窮問答の歌の一節である。「かかふ」は襤褸布のこととされる。

そうした要素へと狭く範圍を限ることに於いて、哀れを催す窮乏のありさまが描かれ、ひいては、貧苦にならず卑下の気味あいもまた立ち昇ってくるのだと言えよう。

④は、狭野弟上娘が中臣宅守に贈った歌の一つである。相手は越前に流されているのだから逢う手立てなどありえようはずもなく、ただ途方に暮れたままに恋い焦がれているしかない。そうした閉塞的なありようを打ち出すものとしてノミが用いられているわけである。草に寄せた寄物陳思の⑤も同様である。

⑥は、その中臣宅守が越前にあつて詠んだ歌である。「ひとなぶり」というものを、大宮人本来の任務からはおよそかけ離れた無益なわざくれとして貶め示すのに、ノミが用いられていると言えよう。

⑦は、天平勝宝七年(七五五年)五月十一日、左大臣・橘諸兄が丹比真人の家で宴を開いたときに、真人が《我がやどに咲けるなでしこ略はせむゆめ花散るないやをちに咲け》(四四四六)と挨拶したのに応えた歌である。下二句については解釈が分かれるが(伊藤利雄注)、《花の賞美にだけ私が訪れるようなあなたではない》(中西進)といった読み方でよいのでは

ないかと思われる。大切なのはもちろん真人という人間のほうであつて、それに較べれば「花」のほうは、ほんの些細な賞翫物に過ぎない。そうした意味合いを打ち出すのにノミの基本的意義の有効に働いているありさまが看取されよう。

こうして（a）グループのノミは、消極性を帯びた様々な要素への収縮性を示すことで、その取るに足らぬありさまを表わすのに用いられていると言えるであろう。ダニや譲歩的なモを伴うものにあつては、とりわけそうしたあり方が明瞭に観察されるのであつた。

第二に、（b）「音のみ泣く」に類する形を取るものは都合十四例見える。ここでも、主格成分の場合に見られたのと類似的事情が見て取れよう。積極的になしうることは何もなく、僅かに泣き声だけを立てているほかない——そんなありようを表わすところから、押しひしがれた無力な状態の表現になるのではないかと考えられるわけである。

まず、次の①～⑥のような例では、「すべ」「たとき」「よし」などの欠如するありさまとともに用いられている点が注目される（破線を施した）。主格成分の場合にそうであつたように、これらもまた積極的な営為への可能性の閉ざされたありさまを示しているからである。

- ①（一五・三七六八）このころは君を思ふとすべもなき恋のみしつづ音のみしそ泣く（祢能未之曾奈久）
- ②（一五・三七七七）昨日今日君に逢はずてするすべのたときを知らに音のみしそ泣く（祢能未之曾奈久）
- ③（一二・三二一八）朝な朝な筑紫の方を出で見つつ音のみそ我が泣く（哭耳吾泣）いたもすべなみ
- ④（一〇・四八三三）朝鳥の音のみし泣かむ（啼耳鳴六）我妹子に今また更に逢ふよしをなみ
- ⑤（一〇・四・五一五）ひとり寝て絶えにし紐をゆゆしみとせむすべ知らに音のみしそ泣く（哭耳之曾泣）

- ⑥（一四・三三九〇）筑波嶺にかか鳴く鶯の音のみをか（祢乃未乎可）泣き渡りなむ逢ふとはなしに

①は、狭野弟上娘子が宅守に贈った歌の一つである（a）の二・④の再掲。越前に流された宅守に逢う手立てなどあろうはずもなく、ただ徒らに泣き声だけをあげているほかない。そんな無力な状態を表わすのが、ここでの「音のみしそ泣く」ではないかと思われる。同じ状況で詠まれた②や、旅先から筑紫の妻に答えた③についても同様であろう。

④は、天平十六年（七四四年）七月二十日、高橋朝臣の、妻の死を悼む長歌に添えられた反歌である。二度と逢うことのできない無力感の中で僅かに泣き声だけを立てているとの意と取れよう。

⑤は中臣の東人が安倍郎女に贈った歌、⑥は常陸国の相聞往来歌であるが、これらにあつても、この言い回しを取ることで、⑤不吉な出来事に恐れおののく心情や⑥逢うことのできない閉塞感の中で、無力さに打ちひしがれるありさまが表わされていると言えよう。

次に、左の⑦～⑩のような例では、無力さそのことが別の言葉で表わされている点に意が留められよう（破線を施した）。

- ⑦（一〇・四・六一九）嘆けども 験をなみ 思へども たづきを知らにたわやめと 言はくも著く たわらはの 音のみ泣きつつ（哭耳泣管）たもとほり 君が使ひを 待ちやかねてむ
- ⑧（一〇・三・四五八）ひとり子の這ひたもとほり朝夕に音のみそ我が泣く（哭耳曾吾泣）君なしにして
- ⑨（一〇・九・一七八〇）臥いまろび 恋ひかも居らむ 足ずりし 音のみや泣かむ（泣耳八将哭）海上の その津をさして 君が漕ぎ行かば
- ⑩（二〇・二・四四七九）朝夕に音のみし泣けば（祢能未之奈奈婆）焼き太刀の利心も我は思ひかねつも
- ⑦は坂上郎女の怨恨の歌の末尾部分である。ここにも「たづきを知らに」の言いまわしが見えるが、同時に「たわやめ」「たわらは」といった語も

現われる。「音のみ泣く」の言い方が、無力さを表わすものであるからこそ、そうした形容もまた添えられるのだと言えよう。

⑧は、天平三年（七三一年）、大伴旅人が亡くなったときに、資人・余明軍の詠んだ歌の一首である。「みどり子の這ひたもとほり」の部分には、一人前の大人としてのあり方をおよそ喪った状態が示されている。そこから後続部へと連なることによって、立つことさえ叶わず、僅かに泣き声だけを立てているほかないといったふうに、力無くずおれ果てたありさまが表わされることになるのだと言えよう。

また、⑨は鹿島郡刈野橋で大伴卿との別れを惜しんだ長歌の末尾部分、⑩は、天平勝宝八年（七五六年）十一月二十三日、池主の邸で酒宴が設けられたときに、大原令城が披露した古歌である（作者は藤原の夫人と左注には記す。この次の歌にも「音のみし泣かゆ」の言いまわしが現われている。主格成分に⑩として掲出。「足ずり」をする状態、「利心」喪失の状態もまた、無力であることのもう一つの表現として、右との同列性を見出すことができる。そのほか、次のように例についても、これまでと同じように考えることができる。

⑪（〇九・一八〇四）葦垣の 思ひ乱れて 春鳥の 音のみ泣きつつ（啼耳鳴乍） あぢさはふ 夜昼知らず かぎりひの 心燃えつつ 嘆き別れぬ

⑫（〇四・〇六一四）相思はぬ人をやもとな白たへの袖ひつまでに音のみし泣かも（哭耳四泣裳）

⑬（〇二・〇一五五）夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと 音のみを（哭耳呼） 泣きつつありてや ももしきの 大宮人は 行き別れなむ

⑭（〇三・〇四八一）言はむすべ せむすべ知らに 我妹子と さ寝し つま屋に 朝には 出で立ち偲ひ 夕には 入り居嘆かひ わき挟む

子の泣くごとに 男じもの 負ひみ抱きみ 朝鳥の 音のみ泣きつつ（啼耳哭管） 恋ふれども 駈をなみと

⑪は弟の死を哀しむ長歌の末尾部分、⑫は山口女王が家持に贈った歌、⑬は天智天皇の陵から退くときに額田王の詠んだ長歌の一節、⑭は妻の死を悲しむ高橋朝臣の長歌の一節である。これらにあっても、「音のみ泣く」の云い方は、それぞれに、無力でしかないあり方を表わすのに用いられているさまが見て取れよう。

こうして（b）グループにあつてノミは、無力感にうちひしがれる中で辛うじてなしうることがらを、「泣き声」という僅かな範囲のものとして示すのに用いられていると言えよう。ノミが〈収縮的単一性〉の意義を備えるからこそ、このような言い回しにおいてもこの語が用いられるわけである。

以上の検討から、対格成分と関わるノミにあつても、（a）（b）の双方を通じて、その接する項目内容の取るに足らぬありさまを表わすものであることが明らかになったのではないかと思われる。〈収縮的単一性〉の意義もまた、そのような形で発現していると考えられることができるであろう。

### 三 「ゝのみに」の形を取るもの

主格・対格の次は与格という順序であるが、「ゝのみに」の形を取るものは、実際には情態修飾的と見なしうるものも多い。ここでは「に」とともに現われるという形の面を重視して、これらを一つの大きなグループとして扱う。この形を取るもの（「に」を訓み添えるものを含む）は、集中に三十一例見える（注⑫）。また「ゝのみに」の形を取るもの（確例のみ）が二例ある。これも併せてここで扱うことにする。これらは次のように分けておくことができる。

（a）格成分的なもの 一〇例



(b) 情態修飾的なもの 二三例（「にのみ」二例を含む）

第一に、(a) 格成分的なものは次の十例である（行頭の\*印は「に」が訓み添えであることを示す。以下同）。

〔花のみに〕

①（〇八・一四六三）我妹子が形見の合歡木は花のみに（花耳<sub>ル</sub>）咲きて  
てけだしく実にならじかも

\*②（一〇・一九二八）狭野方は実にならずとも花のみに（花耳<sub>ル</sub>）咲きて  
見えこそ恋のなぐさに

〔箱のみに〕

\*③（〇七・一三二五）白玉を手には巻かずに箱のみに（匣耳<sub>ル</sub>）置けりし  
人そ玉嘆かする

〔恋のみに〕

\*④（一〇・二二二二）ますらをの心はなくて秋萩の恋のみにやも（恋耳<sub>ル</sub>）  
八方）なづみてありなむ

〔山のみに〕

⑤（一九・四二二七）大殿の このもとほりの 雪な踏みそね しばし  
ばも 降らぬ雪ぞ 山のみに（山耳<sub>ル</sub>） 降りし雪ぞ ゆめ寄るな  
人や な踏みそね 雪は

〔今のみに〕

⑥（〇六・〇九三二）月に異に 日に日に見とも 今のみに（今耳<sub>二</sub>）  
飽き足らめやも 白波の い咲き廻れる 住吉の浜

〔今日のみに〕

\*⑦（一九・四一八七）しくしくに 恋はまされど 今日のみに（今日耳<sub>二</sub>）  
飽き足らめやも

〔しかのみに〕

⑧（一七・三九六〇）庭に降る雪は千重敷く然のみに（思加乃未<sub>ル</sub>）思  
ひて君を我が待たなくに

〔闇のみに〕

\*⑨（一二・三三〇八）久にあらむ君を思ふにひさかたの清き月夜も闇の  
みに見つ（闇夜耳<sub>見</sub>）〔末句異訓あり〕

\*⑩（一一・二八一）この言を聞かむとならしまそ鏡照れる月夜も闇の  
みに見つ（闇耳<sub>見</sub>）

このうち①④では、枢要的要素の欠落が明瞭に言い表わされている点で注目されよう。主格成分でもそうした言い方が見られたが、ここでも同様の事象が観察されるわけである。

①は紀女郎が合歡の花を贈ってきたのに対する家持の返歌である。お贈り下さった合歡の花は、花だけ咲いて実に成らないのではないかと歌っている。「花に咲く」ことは、「実に成る」ことへの前梯的なものに過ぎない。ノミは、そのような要素へと向けて狭く収まりこむかのように範囲を限っている。そうした点に、この語の特質のよく現われ出ているさまが見て取れよう（紀女郎の歌は、先に主格成分（a）のイ・⑨として掲げた）。

②は春の相聞に掲げられた問答歌であり、問いの歌である。「狭野方」は未詳の植物名とされる。実に成らないまでもせめて花に咲き出てほしい（末永く結ばれなくてもせめて逢つてほしい）との意であろう。十全なありようから引き下がった形での願いを表わすのにノミが用いられている。枢要的要素を譲歩的に捨てながら、辺縁的要素へと縮こまる形での願望を述べるところから、そうした意味が醸成され来たるのだと言えよう。

③は玉に寄せた譬喩歌である。白玉を「箱に置く」ことと「手に巻く」こととの間には、①②と同様の軽重差を認めることができる。ノミは、その前者だけに狭く閉ざされることを表わす。そこから「肝腎のことは欠けたままで」といった遺憾の思いもまた立ち昇ってくる。そのような形で「収縮的単一性」の意義が発揮されているわけである。

④は花を詠んだ秋の雑歌である。花に心奪われることへの自己批評の形で、秋萩を賞美したものであろう。花に恋い焦がれるなどという、大丈夫

にはおよそ不似合いな不甲斐ない状態に埋もれ込んでしまうこと——そんな意味あいを表わすのにノミに固有の意義が活かされていると言える。

⑤以下の例にあつても、ノミがその接する項目内容を僅かなものとして示すこと自体は、これまでのものと同じであろう。

⑤は、藤原房前の意を受けて三方沙弥の詠んだ歌が、笠子君を経て、久米広縄によつて伝えられたものである（全文）。雪の稀少性を言うために「山のみ」と場所を僅かなものに限っている。「収縮的単一性」の意義にふさわしい用いられ方だと言えよう。

⑥は、神亀二年（七二五）十月、難波の宮に行幸があつたときに、車持の千年の詠んだ長歌の後半部分である。住吉の浜を詠み込んでいる。「見とも」の続き具合が捉えにくいのが、伊藤釈注に《月ごと日ごとにいくら続けて見たとしても満足できるものではないが、まして見ている今だけで見飽きることなどあるものか》と訳してあるのに姑く従つておく。今という時点が、風光を味わい尽くすべく余りにも短い時の間でしかないことを表わす点に、ノミの特質がよく見て取れよう。

⑦は、天平勝宝二年（七五十年）四月六日、布勢の水海を遊覧した時の長歌の一節である。たつた一日見ただけで満足できるわけがないむね詠んでいる。ここでもノミは、今日という日がほんの僅かな時間でしかないことを言うのに用いられているわけである。

⑧は、天平十八年（七四六年）十一月、池主が都への使いから帰つてきたのを喜んで、家持が宴の席で詠んだ歌である。この日は雪が頻りに降り積もっていたが、しかし、池主を待ち焦がれる気持ちはそれを遙かに上まわるといのである。千重に降り積もる雪を敢えて取るに足らぬものと見なすことによつて、「君」を思ふ心の熱さを伝えようというのがこの歌の眼目である。ノミが《収縮的単一性》の意義を備えるからこそ、そうした詠歌の要請にも十二分に応えることができるのだと考えられよう。

⑨は別れを悲しむ歌である（注⑬）。長らく逢えないであろうあなたのことを思うと、月を浮かべた皓々たる夜空もただ闇夜に等しいものではない。そんな主観的眞実を表わすのにノミが用いられている。通常なら賞美の対象となるものが、この場合には一片の価値をも持たない。ノミは、そうしたありようを表わすのに恰好の手立てを供しているわけである。

⑩は問答歌のうちの「答」の歌である。「問」の歌には《音のみを聞きてや恋ひむまそ鏡直目に逢ひて恋ひまくもいたく》とあつた（前節（a）のイ・⑦）。その引つ込み思案な態度を嘆く歌であるが、ノミのはたらく方自体は⑨と同じだと言えよう。

こうして、（a）グループにあつてノミは、その接する項目の内容が僅かなものでしかなくことを示すのに用いられている。そうしたあり方において《収縮的単一性》の意義が発現していると考えることができるであろう。

第二に、（b）情態修飾的なものとしては二十三例が挙げられる。これはさらに次のように分けておくことができる。

イ…夢のみに	六例
ロ…音のみに	四例
ハ…よそのみに	八例
ニ…片恋のみに	二例
ホ…面影のみに	一例
ヘ…「」にのみ	二例

（計 二三例）

これらを情態修飾的と呼ぶのは、それらがそれぞれに「体験のしかた」を規定するのにはたらいっていると見られるからである。そしてその規定内容は、何らかに欠落を含んだ非充足的なありようを見せていると言えよう。

まず、イ…「夢のみに」の形を取るものは次の六例である。夢で体験されることながら擬似現実的なものに過ぎないことは縷説に及ぶまい。ノミ

は、そのようなあり方への収縮性を示すことによって、その体験が不満足なものでしかないことを表わしている。

\*①（一一・二五五三）夢のみに（夢耳）見てすら（尚）ここだ恋ふる我は現に見てばましていかにあらむ

②（一九・四二三七）現にと思ひてしかも夢のみに（夢耳）手本まき寝と見ればすべなし

\*③（一二・二八八〇）現にも今も見てしか夢のみに（夢耳）手本まき寝と見れば苦しも

④（一四・三四七一）しまらくは寝つつもあらむを夢のみに（伊米能未尔）もとな見えつつ我を音し泣くる

\*⑤（〇七・一二三六）夢のみに（夢耳）継ぎて見えつつ竹島の磯越す波のしくしく思ほゆ

\*⑥（一一・二四七九）さね葛後も逢はむと夢のみに（夢耳）うけひ渡りて年は経につつ〔澤瀉注釈では「夢のみを」と訓んでいる〕

①は正述心緒の歌である。「に」は補読だが、今はスラとともにあることが語義との関連において注目されよう。スラは極端な要素を示すのに用いられるとされる（文献<sup>29</sup>、六一〇頁。⑦、二七四頁）。ここではそれが、類推の基盤となる事柄を形作ることもなっている。「僅かに夢だけで逢うというのであっても、それでもなおかつ、大いに恋い焦がれる私であつてみれば、実際に逢った時には決してどんなに恋い慕うことであろうか」との趣意であろう。ここでの「夢のみ」は「小」の側における極端性を用意している。ノミが（収縮的単一性）の意義を備えるからこそ、そのような形でスラとの協働を果たすこともできるのだと考えられよう。

②以下ではもはやこのような要素との共存は見られないが、「体験のしかた」をめぐつて、擬似現実的なものでしかないことを示すというはたつき方自体は、右と同じであろう。②は、天平勝宝三年（七五一年）正月三日、内蔵の忌寸繩麻呂の館での宴席で遊行女婦・蒲生の娘子が披露した作

者不詳の歌である。妻の死を悼む内容だが、官人たちの郷愁を慰めるために悲歌を持ち出したとされる（伊藤積注）。下三句は、夢のただけで手枕を交わすと見るのは何ともしまならないとの意である。ここでもノミは、共寝をすることが僅かに夢の中だけに限られることを言うことで、体験として極めて不十分なものであることを表わしている。③の正述心緒の歌は右と類想的と見てよいであろうし、④の国名未詳の相聞歌や⑤の羈旅の歌についても、夢の中だけでしか逢えないことの不満足さを表わす点では同じだと言えよう。⑥の寄物陳思の歌は「うけひ」の語義がやや掴みにくいが、仮に「しかじかの夢を見たらのちに逢える」（伊藤積注）ことを寝る前に誓い祈ることであるとすれば、僅かにそのようなことがらに望みをかけるに過ぎないといった意味あいでも受け取ることもできよう（この場合「夢のみ」は祈るという営みの帰着点として格成分的なありようを帯びるとも考えられるが、それ自身の内に縮こまるかのように範囲を狭く限るというノミのはたらかきかた自体は、これまでのものと同列に捉えることができると言えよう）。

次に、ロ…「音のみに」の形を取るものとしては、次の四例が挙げられる。ここでもノミは、対象との関わり方が間接的なものでしかなくことを打ち出すのに用いられている。

①（一八・四〇三九）音のみに（於等能未尔）聞きて目に見ぬ布勢の浦を見ずは上らじ年は経ぬとも

\*②（〇八・一六六〇）梅の花散らすあらしの音のみに（音耳）聞きし我妹を見らくし良しも

③（一一・二六五八）天雲の八重雲隠り鳴る神の音のみに（音耳）聞きわたりなむ

\*④（一二・三〇九〇）葦辺行く鴨の羽音の音のみに（声耳）聞きつつもとな恋ひわたるかも

①は、天平二十年（七四八年）三月二十三日、橘氏の使者・田辺の福麻

呂を家持の邸に招いたときに福麻呂の詠んだ歌、②は同伴の駿河麻呂が詠んだ冬の相聞歌である。単に伝え聞くに過ぎないことと、現に自分の目で見ることとの間には、その存在感において格段の開きがある。ここでのノミは、前者への収縮的な限定を施すことにおいて、両者における落差の大きさを示すのに与っている。それによって、①では後者を求めて止まない心が、②では現にそれを得たことの喜びが、それぞれ歌い上げられることにもなるわけである。

③④は寄物陳思の歌である。③では噂の上だけでしか関わり得ないことを懼れ、④では現にそうであることを嘆いている。ここでもノミは、相手との関わり方がきわめて物足りないものでしかないことを表わすのに用いられていると言えよう。〈収縮的単一性〉の意義においてそれがなされるわけである。

さらに、ハ…「よそのみに」の形を取るものとして、次の八例がある。ここでも右と同様の事情が観察される。

① (一五・三六二七)〔家島を〕はやく来て 見むと思ひて 大船を  
漕ぎ我が行けば 沖つ波 高く立ち来ぬ よそのみに (与曾能未尔)  
見つ過ぎ行き 玉の浦に 船をとどめて

② (一九・四二六九) よそのみに (余曾能未尔) 見ればありしを今日見  
ては年に忘れず思ほえむかも

\*③ (〇四・〇五九二) 闇の夜に鳴くなる鶴の外のみに (外耳) 聞きつつ  
かあらむ逢ふとはなしに

\*④ (一〇・一九九三) よそのみに (外耳) 見つつ恋ひなむ紅の末摘む花  
の色に出でずとも

\*⑤ (一二・三二五一) よそのみに (外耳) 君を相見て木綿疊手向の山を  
明日か越え去なむ

\*⑥ (一二・二九八三) 高麗剣わが心ゆゑよそのみに (外耳) 見つつや君  
を恋ひわたりなむ

\*⑦ (一二・三〇〇一) 春日野に照れる夕日のよそのみに (外耳) 君を相  
見て今ぞ悔しき

\*⑧ (〇四・〇七一四) 心には思ひわたれどよしをなみよそのみにして (外  
耳為而) 嘆きそ我がする

①は遣新羅使による属物発思の歌である。家島の「家」という名に惹かれて舟を近づけようとしたものの、波が高いのでよそながら見て通り過ぎたむね詠んでいる。近づいて具さに見たいと思いがちながらも、そうすることができず、よそながらだけ見ているほかない——そんな非充足感を表わすのにノミが用いられている。対象との関わり方を遠く離れたものでしかないあり方へと狭く絞りこむところから、そうした意味がもたらされるのだと言えよう。

②は天平勝宝四年(七五二年)十一月八日に、橘諸兄の邸で行われた宴で聖武天皇によって詠まれた歌である。諸兄邸を褒める内容となつてゐる。今まではよそながらだけ見ていたから平気でいられたが、今日このように見てしまった以上は永く忘れることができないとの意である。邸との関わりの稀薄でしかなかったありかたを表わすのにノミが用いられていると言えよう。

③は笠の郎女が家持に贈った一連の歌のうちの一首、④は花に寄せた夏の相聞、⑤は羈旅発思の歌、⑥⑦は寄物陳思の歌、⑧は家持が娘子に贈った歌の一つである。いずれも、相手との交渉が密度薄いものでしかないことを表わすのにノミが用いられている。遠く離れたあり方へと向けて収縮的な限定を施すことで、それがなされるわけである。

また、二…「片恋のみに」、ホ…「面影のみに」の形を取るものとして、それぞれ次のような例が見える。

〔片恋のみに〕

① (〇三・〇三七二) 容鳥の 間なくしば鳴く 雲居なす 心いさよひ  
その鳥の 片恋のみに (片恋耳二) 昼はも 日のことごと 夜はも

夜のことごと 立ちて居て 思ひそ我がする 逢はぬ兄ゆゑに

\*②（一一・二七九六）水くくる玉にまじれる磯貝の片恋のみに（独恋耳）  
年は経につつ

〔面影のみに〕

\*③（〇四・〇七五二）かくばかり面影のみに（面影耳）思ほえはいかに  
かもせむ人目繁くて〔伊藤釈注は「面影にのみ」〕

①は赤人が春日野に登って作った歌である。「片恋」という、双方向性を拒まれたあり方へと範圍を狭く限ることで、いくら思っても何ら報われることのない不甲斐ない状態が表わされていると言えよう。そのような無力でしかない状態が終日終夜続くわけである。②の寄物陳思の歌も「片恋のみに」の表わす意味あい自体は右と同じであろう。

③は家持が坂上大嬢に贈った一連の歌の一つである。「こんなふうに、ただ面影だけに見える状態で物思いが募るならば、どうすればよいのか」との趣意であろう。生身の人間に逢うことからまったく隔てられた状態を言うのが「面影のみ」であろう。ここでも、〈収縮的単一性〉の意義において被疎外的な意味あいもたらされると見ておいてよいのではないかと思われる。

最後に、へ…「ゝにのみ」の形を取ることが仮名書きからはつきりと知られるものとして、次の二例がある。

〔よそにのみ〕

①（二〇・四三五五）よそにのみ（余曾尔能美）見てや渡らも難波渦雲  
居に見ゆる島ならなくに

〔いやましににのみ〕

②（一八・四一一六）行く水の いや増しにのみ（伊夜末思尔乃末）  
鶴が鳴く 奈呉江の菅の ねもころに 思ひ結ばれ

①は、上総の国の防人の歌である（左注には武射郡の丈部山代の作とする）。難波渦は故郷の上総とも陸続きであるのに、雲居の彼方に見える島

のように、よそながらにだけしか見ないまま通り過ぎてゆくことになるのだろうか……そんな旅の思いを歌っている。「にのみ」の語順を取るものであり、中古的なありようへと移り変わる兆しを見せた例かとも考えられるが（全注、一二〇頁）、意味自体は、この形のままで「よそのみに」と同じように受け取ることも、あながち不可能とも言えないのではないかと思われる。

②は、天平感宝元年（七四九年）閏五月、久米の広縄が都への使いから帰ってきたときに、家持が宴の席で詠んだ長歌の一節である。射水川の雪解け水によそえて物思いの募るさまを詠み込んでいる。ここでもノミは「に」に後接している。語順から見れば平安時代ふうである。しかし、意味自体は奈良時代ふうに読むこともできない。思い結ばれるというありかたが増せば増すほど、無力になるのであってみれば、それがいや増すことは、心も細るような抑鬱性のうちに止まらざるを得ないことを意味する。ここでの「いや増しにのみ」を、そのような被疎外的な逼塞性の表現と受け止めることも、できないわけではないと思われる。そのように考えるならば、上來見てきたノミとの同列性を認めることも、あながち不可能とは言えないのではないかと思われる。

こうして（b）グループのノミは、イ・ホの各小類においては対象との関わり方の稀薄でしかないことを表わすのに与っていると認められよう。そのようなありかたにおいて〈収縮的単一性〉の意義の現われ出ているありさまを観察することができるわけである。そして、へ…「ゝにのみ」の形を取るものにあっても、それと同質のあり方を認めることが、必ずしもできないのではないのであった。

以上の検討から、「ゝのみに」の形を取るものにあっても、それぞれのあり方において〈収縮的単一性〉の意義の發揮されているありさまを認めることができるであろう。



#### 四 連用諸成分と関わるもの

向述語的成分と関わるノミは、これまで取り上げてきたものの以外に、さらに五十六例が数えられる。それらは大きく次のように分けておくことができる。

- (a) 一般の連用諸成分と関わるもの 三四例
- (b) 特に「かくのみ」を用いるもの 一九例
- (c) 接続助詞を承けるもの 三例

(計 五六例)

第一に、(a) 一般の連用諸成分に附属するものは三十四例見える。これはさらに次のように細分しておけよう。

- (a・1) 性質的なもの (二八例)
    - イ…外のみ 七例
    - ロ…隠り(て)のみ 六例
    - ハ…その他のもの 五例
  - (a・2) 分量的なもの (二六例)
    - イ…数と関わるもの 一〇例
    - ロ…時点と関わるもの 六例
- これらにあつてノミは、その接する語句によつて示される内容が取るに足らぬ僅かなものでしかないことを示すのに働くであろう。
- まず、(a・1) 性質的なもののうち、イ…「よそのみ」の形を取るものは次の七例である。
- ① (一七・三九七八) 卯の花の にほへる山を よそのみも (余曾能未母) 振り放け見つつ 近江道に い行き乗り立ち
  - ② (一七・四〇〇〇) あり通ひ いや年のはに よそのみも (余曾能未母) 振り放け見つつ
  - ③ (一一・二五二二) 恨登思狭名盤在之者よそのみぞ見し(外耳見之)

心は思へど(上三句は難訓とされる)

- ④ (〇四・〇五四六) 三香の原 旅の宿りに 玉梓の 道の行き逢ひに 天雲の 外のみ見つつ(外耳見管) 言問はむ よしのなければ
- ⑤ (一九・四一六九) あしひきの 山のたをりに 立つ雲を よそのみ 見つつ(余曾能未見都追) 嘆くそら 安けなくに
- ⑥ (〇三・〇三八三) 筑波嶺を外のみ見つつ(外耳見乍) ありかねて雪消の道をなづみ来るかも
- ⑦ (一一・三一六六) 我妹子をよそのみや見む(外耳哉将見) 越の海の子難の海の鳥ならなくに

このうち①②は、譲歩的な「も」とともに用いられている点が注目されよう。

①は、天平十九年(七四七年)三月二十日、越中赴任中の家持が恋の思いを詠んだ歌である。ここは、郭公の鳴く季節になったらはやく都に帰つて妻に会おうという内容を歌っている。卯の花の咲き匂う山に近寄つてつばさに眺められればいぢばんよいが、それができないなら、せめて離れたところからだけでも仰ぎ見ながら都へ帰ろうというのである。これまでも何度かあつたように、「のみも」の形で「だけでも」といった譲歩的な意味あいの形作られていることが了解されよう。その中にあつてノミは、「よそながら」という親密さから隔てられたありようへと縮こまるかのような範囲の狭さを示している。それによつて、最善から引き退いたありかたもまた表わされるに至るわけである。

- ②は、天平十九年四月二十七日、越中赴任中の家持が詠んだ「立山の賦」の一節である。ここでもノミは、《山に登らずよそながらも眺めやつて》(澤瀉注釈)といった譲歩的な意味を形成するのに用いられている。右と同じように考えることができよう(このあと「音のみも 名のみも聞きてともしぶるがね」へと続いてゆく。対格成分(a)のイ・②として掲げた)。
- ③以下の例ではもはや譲歩的な意味合いを表わす言葉は見られないが、

対象との関わりかたが充足性を欠いた不本意なものであることに変わりはなく、ノミは、本来の願わしいありかたから疎外されたありさまを表わすのに働いていると言えよう。

③の上三句は難訓とされるが、下二句だけの意味で考えるならば、『よそながら逢ひ見ただけでありました。心には思うてあましたけれど』（澤瀉注釈）の意となる。ここでも、最善のものから引き退く姿勢を読み取ることができる。この点で①②と通うわけである。

④は、神亀二年（七二五年）三月、笠金村が娘子を得たのを喜んで詠んだ長歌の一節である。ここは娘子を得る前の状態を述べている（主格成分（a）のロ・⑤に、これに続く部分を掲げた）。近づく手立てとてなくただ遠くから眺めているに過ぎない——そんな被疎外的な状態を表わすのにノミが用いられていると言えよう。

⑤は、越中赴任中の家持のもとへ下向してきた妻・坂上の大嬢が、都に残してきた母（坂上の郎女）に贈るための歌を家持が代作したものである。「外のみ見つ」については、中西氏の脚注に『越えることなく』とあるのが参考となる。離れてきた都へと近づくよすがもなく、ただ離れて見ることだけしかできないとの意であろう。そうした点に、『収縮的単一性』の意義のはたらくさまが見て取られるわけである。

⑥は、丹比の国人が筑波山に登った時の歌である。「よそのみ」の部分は、傍観的に消極的な状態ではないことを表わしている。最終的にはそれが行為によって捨て去られる。ことほどさように満たされない状態であったことが知られよう。

⑦は、『羈旅発思』の歌である。ここでは不本意なありようを行為によって抜け出るには至らず、内省的に沈潜する形を取っているが、ノミによってもたらされる意味合い自体は右と同じであると言えよう（注⑭）。

次に、ロ…「隠り（て）のみ」の形を取るものとしては、次の六例を挙げることができる。ここでのノミは、被疎外的な屏息状態を表わすのに働

いている。

①（〇二・〇二〇七）玉かざる 磐垣淵の 隠りのみ（隠耳） 恋ひつ  
つあるに 渡る日の 暮れぬるがごと 照る月の 雲隠るごと

②（〇八・一四七九）隠りのみ（隠耳） 居ればいぶせみ慰むと出で立ち  
聞けば来鳴くひぐらし

③（一〇・一九九二）隠りのみ（隠耳） 恋ふれば苦しなでしこの花に咲  
き出よ朝な朝な見む

④（一六・三八〇三）隠りのみ（隠耳） 恋ふれば苦し山のはゆ出で来る  
月の頭はさばいかに

⑤（〇六・〇九九七）住吉の粉浜のしじみ開けもみず隠りてのみや（隠  
耳哉） 恋ひわたりなむ

⑥（一一・二七一五）神奈備の打廻の崎の岩淵の隠りてのみや（隠而耳  
八） 我が恋ひ居らむ

①は、柿本人麻呂が妻の死を哀慟して詠んだ長歌の一節である。前の部分に『ねもころに 見まく欲しけど やまず行かば 人目を多み まねく行かば 人知りぬべみ』とあるように、人目を憚ってあえて不本意な状態に甘んじていたのであって、ノミは、そのような方への収縮的な限定を施すことで、被疎外的な屏息状態を表わすに至っていると考えられることができるであろう。

②は家持がひぐらしを詠んだ夏の雑歌、③は花に寄せた夏の相聞、④は二人の仲を親に打ち明けようと提案する女の歌である。「隠りのみ」という不本意な境涯を、②では行為によって捨て去ろうとし、③ではそれを解消する他の事態を願ひ、④では打開の可能性を仮想的に想い描いている。

これらにあってもノミは、「隠る」という状態への収縮的な狭まりを示すことで、およそ開放感に欠けた不本意な状態に踟躇するさまを表わすに至っているように。

⑤は天平六年（七三四年）三月、難波の宮に行幸があったときの作者不

詳の歌、⑥は寄物陳思の歌である。いずれも、先のイ…「外のみ」の⑦と同様、内省的に沈潜的な嘆きの表現となっている。その中でノミもまた、逼塞的に疎外されたありようを表わすのに与っていると言えよう。

さらに、ハ…「その他のもの」としては、次のような例が見られる。これらにあってもノミは、当該状態への収縮的な限定を施すことで、それぞれに被疎外的なありようを表わすはたらきを担っている。

〔下焦れのみ〕

①（二一・二六四九）あしひきの山田守る翁置く蚊火の下焦がれのみ（下粉枯耳）我が恋ひ居らく

〔消ぬべくのみ〕

②（二二・三〇四五）朝霜の消ぬべくのみや（可消耳也）時なしに思ひわたらむ息の緒にして

〔すかなくのみ〕

③（一七・四〇一五）心には緩ふことなく須加の山すかなくのみや（須可奈久能未也）恋ひ渡りなむ

〔飽かずのみ〕

④（二〇・四三一二）秋草に置く白露の飽かずのみ（安可受能未）相見るものを月を待たむ

〔しきてのみ〕

⑤（二一・二五九六 或本）慰もる心はなしに沖つ波しきてのみやも（數而耳八方）恋ひわたりなむ

①②は寄物陳思の歌、③は逃げた鷹を夢に見て家持の詠んだ長歌に添えられた反歌、④は天平勝宝六年（七五四年）七夕の夜に家持が天の川を仰ぎ見て詠んだ歌、⑤は正述心緒の歌である。①では蚊遣火の燃るように内に籠もる思いが、②では朝霜のようにはかなく思いなされることが、③では心塞いで楽しまない状態が、④では何ら満たされることのない心のありさまが、それぞれの語句によって表わされており、ノミもまたそうしたあ

りようへと縮こまるかのように範囲を狭く限ることによって、その不満足でしかないありかたを表わすに至るのだと言えよう。⑤の「しきてのみ」についても、苦しい思いの止むことが無いといったふうを考えるならば、およそ希望の見出せない逼塞的な状態を表わすと捉えることも許されようかと思われる。

他方、（a・2）分量的なものに目を遣ると、まず、イ…数と関わるものに附属するノミが十例見える。

このうち、まず注目されるのは、「すら・からに・ゆゑに」などとともに用いられた次のような例であろう。

〔一重のみ〕

①（〇四・〇七四二）一重のみ（一重耳）妹が結ふらむ帯をすら（尚三重に結ふべく我が身は成りぬ

〔一夜のみ〕

②（〇九・一七五一）一夜のみ（一夜耳）寝たりしからに（柄二）峰の上の桜の花は 瀧の瀬ゆ 散らひて流る

〔一目のみ〕

③（二一・三〇七五）かくしてそ人の死ぬといふ藤波のただ一目のみ（直一目耳）見し人ゆゑに（故尔）

④（二〇・二三一一）はだすき穂には咲き出ぬ恋を我がする玉かぎるただ一目のみ（直一目耳）見し人ゆゑに（故尔）

①は家持が坂上の大嬢に贈った歌の一首である。「女性が腰の周りにたつた一度きりしかめぐらさなような短い帯であっても、それでもなおかつ三重にもめぐらす、ことほどさように私はやせ細ってしまった」との趣意であろう。一が自然数で最も小さなものであることは絮説を要しない。ノミはそのような要素への収縮性を示すことで、その僅かではないあり方を明示する役割を果たし、そうすることによって、スラによって提示されるにふさわしい極端性を「小」の側で準備することになるのだと言えよ

う。前節（b）のイ・①にもスラと共存する例が見られたが、ここでもそれと同様の事象が観察されるわけである。

②は、一晩だけ難波に泊まって奈良へ帰ってきたときに詠まれた長歌の一節である。この種の「からに」は、『原因がつねにきはめて軽く、かつ多くの場合は結果がきはめて重い』ことを表わすとされる（文献①、一〇六頁）。訳としては「たつた一晩泊まっただけで、それだけでもう、桜の花は激流にもまれて流れてゆく」といったふうになろう（注⑮）。そうした中であつてノミは、「原因の小ささ」を明示化するのはたらきを帯びている。（収縮的単一性）の意義を有するからこそ、このような表現とも積極的に折り合うことができるのだと考えられよう。

③は寄物陳思の歌、④は秋の相聞である。どちらも、たつた一度の出逢いでしかなかったのに、それが重く心に覆いかぶさってくるありさまを詠み込んでいる。「ゆゑに」は「のせいで」といったふうに因果性の範疇を明瞭に打ち出すものであり、二事項間の関係を「のまにまに」といったふうに対象随順的に表わす「からに」（文献①、一〇六―七頁）とは性質が異なるが、実質的な意味内容の面では、これに準えて捉えることの許される場合もあり得るであろう。「ゆゑに」を使つたものであつても、実際の用例では、結果の大きさに比してあまりにも小さい原因であることを示す用い方が一つの類型をなしていると見受けられるからである（注⑯）。

そうした意味で、ここでのノミもまた、原因と結果との大きな落差を示すはたらきを担っていると認められてよいかと思われる。

数詞と関わるもののうち、残る六例はいずれも「ひとりのみ」の形を取っている。ここでもノミは、「ひとり」という語に備わる僅かなあり方を明示化するのはたらきを帯びていると受け止められよう。

⑤（〇八・一六〇二）山彦の相とよむまで妻恋に鹿鳴く山辺にひとりのみして（独耳為手）

⑥（一三・三三二四）ひとりのみ（独耳）見れば恋しみ神奈備の山のも

みち葉手折り来り君

⑦（一九・四一七七）うら悲し 春し過ぐれば ほととぎす いやしき 鳴きぬ ひとりのみ（独耳） 聞けばさぶしも

⑧（一九・四一七八）ひとりのみ（吾耳）聞けばさぶしもほととぎす丹生の山辺にい行き鳴かにも

⑨（一五・三七一五）ひとりのみ（比等里能未）来ぬる衣の紐解かば誰かも結はむ家遠くして

⑩（一四・三四〇五）上野乎度の多杵里が川路にも兄らは逢はなもひとりのみして（比等理能未思弓）

⑤は天平十五年（七四三年）八月十六日、家持が鹿鳴について詠んだ秋の雑歌である。このとき家持は妻（坂上の大嬢）を奈良に残してひとり久邇の京にいた。最後に見える「して」は、『をもちて』『によりて』などの意をあらはせるもの（文献③、六五六頁）であり、この歌での表現性については《云ひさして余情を残した。これも久邇京で家持が妻に別れ住んでゐた実感である》（澤瀉注釈）と評されている。そうした中であつてノミは、既にもつとも小さな数である「一人」に対して敢えて収縮性の意義を付加することによって、僅かさの意味あいを明瞭に打ち出す役割を果たしていると言えるよう。

⑥以下についても同様である。⑥は神南備山の紅葉を詠んだ長歌に添えられた反歌、⑦⑧は天平勝宝二年（七五〇年）四月三日に家持が池主に贈った郭公の歌（長歌とその反歌）、⑨は対馬の竹島の浦に碇泊した時の遣新羅使の歌である。これらにあつても、ノミ自身は⑤と同じはたらきをしていると考えておいてよからう（注⑰）。

⑩は上野国の歌である。「乎度の多杵里」は所在不明の地名とされる。その川沿いの道でなりともあの娘に逢いたいむね歌っている。この歌の「一人のみして」は、或る本の歌の《見る人なし》とほぼ同意であろう。「混じりつけなしにたつた一人っきりで」といった意味あいを打ち出すのにノ

ミが添えられていると言えよう。

次に、口…時点と関わるものとしては左の六例がある。

〔今日のみ〕

①(〇三・〇四一六)ももつたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや(今日耳見哉) 雲隠りなむ

②(〇九・一七五九)この山を うしはく神の 昔より 禁めぬ行事ぞ今日のみは(今日耳者) めぐしもな見そ 事も咎むな

③(〇八・一四八八)いづくには鳴きもしにけむほととぎす我家の里に今日のみぞ鳴く(今日耳曾鳴)

〔七日の夜のみ〕

④(一〇・二〇三二)一年に七日の夜のみ(七夕耳) 逢ふ人の恋も過ぎねば夜はふけ行くも

〔今夜のみ〕

⑤(一〇・二〇八七) 渡り守舟出し出でむ今夜のみ(今夜耳) 相見て後は逢はじものかも

⑥(〇八・一六五七) 官にも許したまへり今夜のみ(今夜耳) 飲まむ酒かも散りこすなゆめ

①は天津の皇子が死の間際に磐余の池のほとりで詠んだ歌である。澤瀉氏の注釈に《今日のみ》の語にこれを見納めとしての感慨がこめられ、「や」は「なむ」にかかる疑問の助詞であるが詠歎の意が強い。》とあるのが要を尽くしている。自分の生きる時間としてたつた一日が残されているに過ぎない。ノミには、そんな嘆息の情が託されていると言えよう。

②は筑波山に登って「かがひ」(歌垣)を見たときに詠まれた長歌の後半部分である。この日は《人妻に 我も交はらむ 我が妻に 人も言問へ》といった交会が許されていた。ノミは、そうした行ないの許されるのが「今日」というたった一日でしかないことを表わすのに用いられている。

③は郭公を喜んだ家持の歌である。詞書には「懼」の字が使われている。

すぐ前に郭公がなかなか鳴かないことを恨む歌が二つ並んでいる。今までずっと待たされたあげくに、今日という日になって初めて鳴いた。そんなゆくたての中で「今日のみ」という語が用いられている。そこから《今日こそ鳴いてゐるよ。》(澤瀉注釈)といった気味あいいも生じてくるが、ノミ自身のしていることは右の二例と同じだと考えておいてよいのではないかと思われる。

④⑤は七夕を詠んだ秋の雑歌、⑥は坂上の郎女の詠《酒杯に梅の花浮かべ思ふどち飲みての後は散りぬともよし》に対する返歌である(注⑬)。  
④では暦日を用いて特定の日が指定され、⑤⑥では発言の現在を直示しているが、これらにあっても、「二年のうちでたった一日だけ」「今夜たった一晚だけ」といったふうに、時点の幅を僅かなものとして限るはたらく自体は、これまでの例と同じだと言えよう。⑤⑥では、そこに更に反語的な表現がかぶさることによって最終的には累加表現的なありようをも帯び来たっているわけである。

こうして、一般の連用諸成分と関わるノミにあつては、あるいは情態的なありようをめぐって、もしくは分量性をめぐって、その僅かなものではないあり方を打ち出すのに用いられているありさまを観察することができである。《収縮的単一性》の意義もまた、そのような形で發揮されていると考えられるわけである。

第二に、(b)「かくのみ」の形を取って連用成分を形作るものは凡そ十九例見える(他に述語成分を形作るものが十二例あるが、それは次節で扱う)。

このうち、まず注目されるのは、「からに」「ゆゑに」を伴う次のような例であろう。

〔かくのみからに〕

①(〇五・〇七九六)はしきよしかくのみからに(加久乃未可良爾) 慕ひ来し妹が心のすべもすべなさ



〔かくのみゆゑに〕

②（二・〇一五七）三輪山の山辺まそ木綿短木綿かくのみゆゑに（如此耳故尔）長くと思ひき

①は、妻を喪つた旅人の悲境を、憶良がその人になり代わつて詠んでいる。所謂「日本挽歌」である。「かく」は、任地筑紫に着いて幾日も経たないのに妻の亡くなつてしまったことをさす。「からに」については、《原因がつねにきはめて軽く、かつ多くの場合は結果がきはめて重い》（文献①、一〇六頁）という前引の論が再び参照されよう。妻の運命はあまりにもはかないものでしかなかったのに、そうとも知らずに奈良から九州まではるばると自分に付き従つて来た。そんな妻の心が不憫でならないというのであろう。このような表現にあつて、ノミは、「かく」によつて示されることがらを限られた僅かなものとして示し、それによつて、そのはかないあり方をはつきりと打ち出すのにはたらいっていると言えよう。（収縮的単一性）の意義がそのように活かされているわけである（注⑬）。

②は、十市の皇女の薨去に際して、高市の皇子の詠んだ歌である。新大系の訓みは「かくのみゆゑに」であるが、「かくのみからに」の訓もあり得る（注⑳）。そのように訓むならば、①の場合と同じように考えることができる（注㉑）。

残る十七例は、形の面から次のように細分することができる。

イ…「かくのみ」 四例

ロ…「かくのみし」 七例

ハ…「かくのみや」 六例

これらにあつてもノミは、「かく」によつて指示されることがらが極めて不満足なものでしかないことを示し、それによつて逼塞的に疎外されたありさまを表わすであらう。

まず、イ…「かくのみ」の形で用いられているのは次の四例である。

〈仮定条件〉

①（四・四八四）一日こそ人も待ちよき長き日をかくのみ待たば（如此耳待者）あつかましじ

②（四・五八六）相見ずは恋ひざらましを妹を見てもとなかくのみ（本名如此耳）恋ひばいかにせむ

〈推量〉

③（一三・三二九八）よしゑやし死なむよ我妹生けりともかくのみこそ我が（各鑿社吾）恋ひわたりなめ

④（一七・三九〇二）梅の花み山としみにありともやかくのみ君は（加此乃未君波）見れど飽かにせむ

①は、仁徳天皇の妹が難波にあつて奈良に居る兄天皇に贈つたとされる歌である（巻四巻頭歌）。「かく」は遠く離れたまま何ら積極的なふるまいに出ることもできず、ただ待つほかない状態を指し示すものである。ノミもまた、そうした状態への収縮性を示すことで、無力でしかない状態であることをはつきりと打ち出していると言えよう。

②は、大伴稻公が田村大嬢に贈つた歌である（左注には、坂上郎女の代作と記す）。なまじ見てしまったばかりに、なすすべもなく徒らに恋い焦がれるほかない状態を表わすのがここの「かく」であり、ノミもまた先と同様、その無力なありようを明示するはたらきを担っていると言えよう。

③は相聞の長歌に添えられた反歌であり、「かく」は逢うことができずに終日終夜恋い焦がれているありさまを指す。ノミもまた、そのような状態へと限られてあることを示すことで、その被疎外的な無力さを表わすものとなつていよう。だからこそ、生きることに何ら積極的な意味を見出し得ないことの表現ともなりうるわけである。

④は天平十二年（七四十年）十二月九日、天平二年の梅花の宴の諸作（巻五・八一五以下）に和して書持の詠んだ歌であり、「君」は梅の花を指す。ここでも「かくのみ」は、満足感とはおよそ無縁でしかない非充足的なあ

りようを表わすのに用いられていると言えよう。

次に、ロ…「かくのみし」の形を取るものは次の七例である。ここでの「かくのみ」も、積極的な営為への道を閉ざされた屏息的な状態を表わすのに用いられている。

《恋ひやわたらむ》

① (一〇四・〇六九三) かくのみし (如此耳) 恋ひやわたらむ秋津野になびく雲の過ぐとはなしに

② (一一・二三七四) かくのみし (是耳) 恋ひや渡らむたまきはる命も知らず年は経につつ

③ (一一・二五九六) 慰もる心はなしにかくのみし (如是耳) 恋ひやわたらむ月に日に異に

《仮定条件》

④ (一一・二五七〇) かくのみし (如是耳) 恋ひば死ぬべしたらちねの母にも告げつ止まず通はせ

⑤ (〇九・一七六九) かくのみし (如是耳志) 恋ひし渡ればたまきはる命も我は惜しけくもなし

⑥ (一一・三三二五九) かくのみし (如是耳師) 相思はざらば天雲のよそにそ君はあるべくありける

⑦ (一一・二六〇六) 人目多み常かくのみし (常如是耳志) 候はばいづれの時か我が恋ひざらむ

①は大伴の千室の詠んだ相聞歌、②③は正述心緒の歌である。いずれも、何らなすすべもなくただ恋い焦がれているほかない状態を表わすのに「かくのみ」が用いられていると言えよう。③の初二句にはその具体的なありようを窺い見ることとできる(③の異文「しきてのみやも」は、本節(a・1)のハ・⑤として掲げた)。

④も正述心緒の歌、⑤は拔気大首(ぬきけのおほびと)が筑紫に赴任したときに、豊前の国の紐児(ひものこ)に求婚して詠んだ歌である。ここ

でも「かくのみ」は、恋い焦がれるほか何もできずに押しひしがれたありようを表わすと言えよう。だからこそ、そうした状況の下では命も無くなりそうだし、あるいは捨てて構わないとさえ感じてしまうわけである。事情は⑥⑦でも同じであろう。⑥は相聞の長歌に添えられた反歌、⑦は正述心緒の歌であるが、ここでも「かくのみ」は、片想いに甘んぜざるを得ない状態や人目を憚って屏息的に身を潜めざるを得ないありさまを表わしていると言えよう。

さらに、ハ…「かくのみや」の形を取るものとしては、次の六例が挙げられる。これらのノミにあっても、これまでと同様の事情が観察される。

① (〇五・〇八八一) かくのみや (加久能未夜) 息づきをらむあらたまの来経行く年の限り知らずて

② (〇八・一五二〇) 青波に 望みは絶えぬ 白雲に 涙は尽きぬ かくのみや (如是耳也) 息づき居らむ かくのみや (如是耳也) 恋ひつつあらむ

④ (一七・三九三六) 草枕旅にしばしばかくのみや (可久能未也) 君を遣りつつ我が恋ひをらむ

⑤ (一七・三九三八) かくのみや (可久能未也) 我が恋ひをらむぬばたまの夜の紐だに解き放けずして

⑥ (〇七・一三三三) 海の底沖つ白玉よしをなみ常かくのみや (常如此耳也) 恋ひわたりなむ

①は旅人が任果て奈良に帰るに際して、山上憶良が私懷を詠み上げた歌である。すぐ前の歌には、《天離る鄙に五年住まひつつ》とあった。憶良は、任期の四年を過ぎてなお田舎に留まるほかない身の上であった。「かく」が指し示すのも、そうした展望のかけらも見出せない不如意な境遇であり、ノミもまた、そのような逼塞したありようを明瞭に打ち出すのにはたらいっていると言えよう。だからこそ、なすすすべもなく溜め息をつくほかないわけである。

②③は天平元年（七二九年）の七夕に天の川を仰ぎ見て憶良の詠んだ長歌の一節、④⑤は平群氏の女郎が家持に贈った歌、⑥は玉に寄せた譬喩歌である。これらにあっても「かくのみ」は、なすすべもなく無力であるほか無い状態を指し示すのに用いられていると言えよう。⑤の下三句では、その被疎外的なありようの中身が具体的に示されていると見ることもできる。

こうして、「かくのみ」の形をとる連用成分においても、ノミは、「かく」によって指示されることがらへの収縮性を示しつつ、そのことにおいて、その被疎外的な逼塞性の意味あいを表わすのに与ると言つてよいであろう。

最後に、(c) 接続助詞「ば」を承けるものとして、次の三例が見える。

ここのノミは、後件が成立するのが極めて限られた場合でしかないことを表わすのに用いられている。

①②（〇六・一〇〇五）この山の 尽きばのみこそ（尽者耳社） この

川の 絶えばのみこそ（絶者耳社） ももしきの 大宮所 止む時も

あらめ

③（〇四・〇六七八）直に逢ひて見てばのみこそ（見而者耳社） たまきはる命に向かふ我が恋やまめ

①②は天平八年（七三六年）六月、吉野の離宮に行幸のあったときに赤人の詠んだ長歌の後半部分である。ここのノミは、仮定条件句に接することによって、「もしこの山や川の尽きる時があるとするれば、僅かにその場合に限って」といったふうな意味あいを表わすのに働いていると解されよう。そこにさらにコソが加わることによって、最終的には、『大宮の止む時は無いと信ずる心』（澤瀉注釈）が表わされるに至るわけである（この種のコソについては、文献②・下、七三頁）。

他方③は、中臣の女郎が家持に贈った一連の歌の一首である。右と同じ言い回しを取るによって、ノミは、「恋の思いを鎮めることができる

のは他のどのようなことがらでもなく、直接にあい見えるという、ただそのことだけでしかない」といった意味を表わすのにはたらいっている。そしてそれは『いつかは逢えるだろうという希望への懷疑』であるともされる（伊藤注）。コソに備わるとされる逆接的な響きから、そのような意味あいもまた立ち昇ってくるのだと考えられよう。

以上の検討から、連用諸成分に附属するノミは、それぞれのあり方において、その接する項目内容が僅かなものでしかないと示すのに働いていると認められるであろう。そうした点に、〈収縮的単一性〉の意義の発現するありさまを見て取ることができるわけである。

## 五 述語成分・連体修飾成分と関わるもの

述語成分と関わるノミは二十三例見える。これらは、次の二つに分けておくことができる。

(a) 一般の述語によるもの 一一例

(b) 特に「かくのみ」を用いるもの 一二例

(計 二三例)

第一に、(a) 一般の述語によるものとしては十一例が見えるが、これらはさらに次のように細分することができる。

イ…用言性の語句と関わるもの 七例

ロ…体言性の語句と関わるもの 四例

(計 一一例)

まず、イ…用言性の語句と関わるものには次のようなものがある。

〔述語分節的なもの〕

①（一一・二八三七）み吉野の水隈が昔を編まなくに刈りのみ刈りて（刈

耳刈而）乱りてむとや

②（一〇・二〇九九）白露の置かまく惜しみ秋萩を折りのみ折りて（折

耳折而)置きや枯らさむ

〔なくのみそ〕

③(四・〇七七〇) 人目多み逢はなくのみそ(不相耳會) 心さへ妹を忘れて我が思はなくに

④(一一・二七二五) 白砂御津の黄土の色に出でて言はなくのみそ(不云耳衣) 我が恋ふらくは

⑤(二四・三五六〇) 真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ(伊波奈久能未會) 我が恋ふらくは

〔まくのみそ〕

⑥(一一・二七八九) 玉の緒の絶えたる恋の乱れば死なまくのみそ(死卷耳其) またも逢はずして

〔伏すのみ〕

⑦(一〇・二三〇二) ある人のあな心なと思ふらむ秋の長夜を寢覚め伏すのみ(寢臥耳)

このうち、①②では、「VノミV」の形を取って、なされる動作の内容を狭く限るのにノミが用いられている。

①は譬喩歌である。《いったん関係を持ちながら、添いとげようとする意志のない男の不誠実をなじる女の歌》とされる(伊藤釈注、四五五頁)。

「編まなく」は「妻としようとしないのに」の意を、「刈りのみ刈りて」は「男が自分を我がものとしながら放ったらかしにしておくこと」を、それぞれ譬えている。「折る」という動作が次の動作へと有効に連なっており、単にそれだけのものとして終わってしまうことを言うのにノミが用いられている。その場合、表現のしかたとしては、動作内容を取り出して限定をほどこした上でさらに同じ動詞を重ねることによって、そのように限定されたものとしての動作がなされることを表わす仕組みになっている。それによって、その動作のいわば孤立的なありようが表わされるわけである。

②は秋の雑歌である。もはや「萩」に女性の意を読み込む必要はないが、花の凋れることを惜しむ気持ちを表わすために、右と同じようなしかたでノミが用いられている。「折る」という動作が単にそれだけのものとしてしかなされず、萩の花を救うために有効な次の手立てへと向かってゆかない。そうした「繋がらない」あり方を表わすのに(収縮的単一性)の意義が動員されているわけである(注<sup>22</sup>)。

他方、③④⑤のような例では、「Vナクノミソ」の形を取って動作的事態の帯びる意味あいを小さく限るのにノミが働いている。

③は家持が久邇の京にあって坂上の大嬢に贈った歌、④は寄物陳思の歌、⑤は国名未詳の相聞往来の歌である。いずれも、逢わないことや言葉に出さないことをめぐって、その弁疏を講じたものであって、目に見えることからの帯びる意味あいを極めて軽いものとして示すことによって、目に見えない世界の重みを訴えるという行き方を取っている。(収縮的単一性)の意義がそうした表現上の要請に十二分に応えうるからこそ、ノミがこのように用いられるわけである。

また⑥⑦では、「Vマクノミ」「Vノミ」の形を取っている。ここでも、動作の幅を狭く限るのにノミの働くさまが見て取れよう。

⑥は玉に寄せて思いを陳べた歌である。もし恋い焦がれる気持ちを押さえきれずに乱れてしまったら死ぬほかないとの思いが詠み込まれている。あれやこれやの可能性を総て捨て去って、死ぬというまったく希望の閉ざされた行く末しか想い見ることができない。そんなありようを表わすのにノミが用いられているわけである。

⑦は、夜に寄せる秋の相聞である。人によっては共寝の夜が明けるのをつれないと思うであろうこの秋の長夜を、私はただ目を覚まして横になっているだけだとの趣意であろう。自分にとってなし得ることはこのような味気ないことに過ぎない。そんな意味あいを表わすのにノミが用いられていると言えよう。

右の③～⑦のような云い方は、平安時代にはバカリを用いてなされていた。成章のいわゆる「末ばかり」（文獻<sup>28</sup>、二三九頁）である。わけても左のivは先の④⑤と類想的であるし、vもまた可能性の閉ざされたあり方を表わす点で⑥に通うであろう（古今の本文は新大系に依るが、多少表記を改めた）。

〔なり〕

i（古今・三七八）雲井にもかよふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり（離別、深養父）

ii（古今・一〇五四）よそながらわが身にいとよるとい言へばたゞいつはりにすぐばかり也（雑体、屎）

〔ぞ〕

iii（古今・二二六）名にめでてをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にかたるな（秋上、僧正遍昭）

iv（古今・六〇七）事にいでて言はぬばかりぞ水無瀬河したに通ひてこひしき物を（恋二、友則）

v（古今・六一一）わが恋はゆくへもしらずはてもし逢ふを限と思ふばかりぞ（恋二、躬恒）

〔を〕

vi（古今・四四四）打ちつけに濃しとや花の色を見むおくしらつゆの染むるばかりを（物名、矢田部名実）

vii（古今・四六三）秋くれど月の桂の実やはなるひかりを花とちらすばかりを（物名、源忠）

viii（古今・八六〇）露をなどあだなる物と思ひけむわが身も草におかぬばかりを（哀傷、藤原惟幹）

この種の用法にあつて、ノミはいわば近似的にバカリへと推移するわけであつて、こうしたことも、上代のノミが（収縮的単一性）の意義を有していたであろうことを何ほどか証拠立てるのではないかと思われる。

次に、ロ…体言性の語句と関わるものとしては次のような例が挙げられる。

〔今日のみ〕

①（二〇・四四八）み雪降る冬は今日のみ（布由波祁布能末）うぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし

〔一夜のみ〕

②（二〇・二〇七八）玉かづら絶えぬものからさ寝らくは年の渡りにただ一夜のみ（直一夜耳）

〔二人のみ〕

③（一一・二七五一）あぢの住む渚沙の入江の荒磯松我を待つ児らはただひとりのみ（但一耳）

〔のみにあらず〕

④（一六・三八二七）一二の目のみにはあらず（耳不有）五六三四さへありけり双六の頭

①は天平宝字元年（七五七年）十二月十八日、三形の王の家で宴をしたときに、主の王が詠んだ歌である。この年は翌十九日が立春であつた（伊藤注<sup>23</sup>）。古今巻頭歌にも似て、年内立春の歎びを詠み上げた歌である（注<sup>23</sup>）。冬はあと僅かに今日一日を残すだけとなつた——。初二句には、そうした春の到来を喜ぶ気持ちに託されている。（収縮的単一性）の意義もまた、そのような意味あいを積極的に打ち出すのに与つていると言えよう。

②は七夕を詠み込んだ秋の雑歌である。共寝のできる日が一年のうちのたった一日だけでしかないことを言うのにノミが用いられている。①とは反対に少なさを嘆く歌であるが、ノミのはたらき方自体は同じである。③は寄物陳思の歌である。想いを寄せる人がこの広い世界にたった一人しか居ないことを言うのにノミが用いられている。それによって、その人に対する愛おしみの情もまた託されていると言えよう（注<sup>24</sup>）。



最後に④は、双六の采を詠んだ歌である。単なる累加表現とも見られるが、ノミのもととの意味からすれば、「一と二の目」などという、そんな僅かなものに留まるものではないといったありかたを表わすことにおいて累加表現に参加していると考えられることも許されよう。

こうして、一般の述語成分と関わるノミにあつては、様々な形で、述語の内容を僅かなものでしかないものとして示すのに用いられているありさまを観察することができるであろう。（収縮的単一性）の意義もまた、そのような形で発揮されていると考えられるわけである。

第二に、（b）特に「かくのみ」を用いるものは十二例が見える。前節の連用諸成分にもこの形は見えたが、ここではそれが述語成分を形成する形で姿を見せている。それらは、形の面からさらに次のように細分することができる。ここでのノミは、「かく」によつて指示されることがが僅かであるに過ぎないことを示し、それによつて、恃むに足りぬはかないありさまを表わしていると言えよう。

イ…「かくのみならし」

五例

ロ…「常かくのみと／か」

三例

ハ…「かくのみにありけるものを／君を」

四例

（計 一二例）

まず、イ…「かくのみならし」の形を取るものは次の五例である。

①（〇五・〇八〇四）手束杖 腰にたがねて かければ 人にいとほえ  
かく行けば 人に憎まえ 老よし男は かくのみならし（迦久能尾奈良志）  
たまきはる 命惜しけど せむすべもなし

②（〇五・〇八〇四）常なりし 笑まひ眉引き 咲く花の うつろひに  
けり 世の中は かくのみならし（可久乃未奈良志）

③（〇五・〇八八六）国にあらば 父取り見まし 家にあらば 母取り  
見まし 世の中は かくのみならし（迦久乃尾奈良志） 犬じもの  
道に伏してや 命過ぎなむ

④（〇三・〇四七八）御心を 見し明らめし 活道山 木立の茂に 咲く花も 移ろひにけり 世の中は かくのみならし（如此耳奈良志）  
⑤（一九・四一六〇）あしひきの 山の木末も 春されば 花咲きにほひ 秋づけば 露霜負ひて 風交じり 黄葉散りけり うつせみも かくのみならし（如是能未奈良志） 紅の 色もうつろひ ぬばたまの 黒髪変はり

①は、神亀五年（七二八年）七月二十一日、筑前の守であつた憶良が老いの嘆きを詠んだ長歌の最終部分である。「かく」の中身は先行の句に具体的に示されている。ノミは、それに接することによつて、「そのようなものでしかない」といった意味あいを出すのに働いている。そこに、老衰という避けがたい定めに対する、嘆きに充ちた諦めの思いもまた託されるに至るのだと言えよう。②は、同じ長歌の中ほどの部分に示された異文である。ここでも、「かく」の中身は先行する部分から窺い見ることができるし、ノミの果たしている役割も同じであろう。

③は、大伴の熊凝が十八歳で客死したのを悼み、熊凝に成りかわつて憶良の詠んだ長歌の末尾部分、④は天平十六年（七四四年）二月、安積の皇子が薨ぜられたときに、内舍人であつた家持の詠んだ長歌の一節（詠歌の時点は三月二十四日）、⑤は、天平勝宝二年（七五十年）三月、世の中の無常を悲しんで家持の詠んだ長歌の一節である。これらにあつても、「かくのみ」はそれぞれに、この世のはかなさへのやる瀬ない諦めの心を表わし得ていると言えよう。

次に、ロ…「常かくのみと／か」の形を取るものとしては、次の三例が挙げられる。

①（〇三・〇四七二）世の中し常かくのみと（常如此耳跡） かつ知れど 痛き心は忍びかねつとも

②（一五・三六九〇）世の中は常かくのみと（都祢可久能未等） 別れぬる君にやもとな我が恋ひ行かむ

③（〇七・一三二一）世の中は常かくのみか（常如是耳加）結びてし白玉の緒の絶ゆらく思へば

①は天平十一年（七三九年）六月、妻が亡くなった悲しみの癒えないままに家持の詠んだ歌、②は壱岐の島で客死した雪連宅満を悼んで詠まれた長歌の一節、③は玉に寄せる譬喩歌である。これらにあっても「かくのみ」は、「所詮このようにはかないものではない」といった意味あいを表わしている。「かく」によって指示される内容へと縮こまるかのような限定をノミが示すことによって、積極的なあり方を何ら見出せないままに諦観にうち沈む心のありようもまた立ち昇ってくるわけである（注<sup>25</sup>）。

さらに、ハ…「かくのみにありけるものを／君を」の形を取るものとして、次のような例が挙げられる。

①（〇三・〇四五五）かくのみに（如是耳）ありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも

②（〇三・〇四七〇）かくのみに（如是耳）ありけるものを妹も我も千歳のごとく頼みたりけり

③（一二・二九六四）かくのみに（如是耳）ありける君を衣ならば下にも着むと我が思へりける

④（一六・三八〇四）かくのみに（如是耳）ありけるものを猪名川の奥を深めて我が思へりける

①は大伴旅人が亡くなったときに、資人・余明軍の詠んだ歌である。旅人は天平三年（七三一年）七月二十五日に亡くなった。帰京して僅か半年後のことであった。また②は、天平十一年（七三九年）六月、妻が亡くなった悲しみの癒えないままに家持の詠んだ歌である（この歌の二首あとに、先掲口・①の「世の中し常かくのみとかつ知れど」の歌が見える）。いずれも「かく」は、人間の命のもろくはかないことを指し示している。ノミもまた、そうしたありようへと狭く限られるさまを示すことによって、「このように短い命でしかなかったのに」といったふうに、その持つ

に足らぬはかなさを表わすのに働いていると言える。

他方③は寄物陳思の歌であり、相手の薄情さを恨む内容となっている。ここでもノミは、「こんな顛末でしかなかったのに」といったふうな、結果に対する味気ない失望落胆の情を担い得ていると言える。

また④は、新婚早々任地に出かけた夫が、帰って来て妻のやつれはてた姿を見て詠んだ歌である。初二句は、「こんな哀れな結末が待ち受けているに過ぎなかったのに」といった意味あいを表わすものである。現に生きている妻を目の前にして、この表現はややそぐわないようにも見えるが、直面した現実とそれまでの思いとの「大きな落差」を表わすのに用いられている点では、これまでの例との同質性が見て取れる。

こうして、「かくのみ」を用いた述語にあつて、ノミは、「かく」によって指示されることがが僅かなものでしかないと示し、それによって、その持つに足らぬはかないありようを表わすのに働いていると言える。そのような形で「収縮的単一性」の意義が現われ出ているわけである。

最後に、連体修飾成分と関わるものが一例見える。

①（〇四・〇四九八）今のみの（今耳之）わざにはあらず古の人そまさりて音にさへ泣きし

右は人麻呂の詠んだ相聞歌四首のうちの一つである。《恋に苦しむのは今だけのことではない》（澤瀉注釈）むね詠まれている。累加的表現に参加しているが、この場合にもノミは、「今だけなどといった、そのような僅かな時間にとどまることなく」といったふうな意味あいにおいて、それを行なっていると考えられることも許されよう。

以上の検討から、述語成分や連体修飾成分と関わるノミにあつても、「収縮的単一性」というこの語に固有の意義の、一貫して發揮されているありさまを認めることができるであろう。

## むすび

以上、万葉集から副助詞ノミの用例を取り上げて、その使われかたを見てきた。そのそれぞれの用例において、「収縮的単一性」という基本的意義の發揮されているありさまを観察することができたのではないかと思われる。そこで明らかになった事柄を成分ごとに記せば、おおよそ次のようになる。

- ① 一般的主述関係をなすものにあつてノミは、その主語項目の中身が極めて限られたものでしかないことを表わす。
- ② 「音のみし泣かゆ」の形を取るものは、我が身に生ずる事柄を「泣き声」という僅かなものへと限ることでも無力な状態の表現となる。  
(以上第一節)
- ③ 一般の対格成分にあつては、対格項目の取るに足らぬありさまを表わす。
- ④ 「音のみ泣く」に類する云い方を取るものは、自身のなし得ることを「泣き声」という僅かなものに限ることでも無力な状態の表現となる。  
(以上第二節)
- ⑤ 二格の成分にあつては、その項目内容が僅かなものでしかないことを表わす。  
(以上第三節)
- ⑥ 情態修飾的なものでは、その情態性の非充足的なあり方を表わす。  
(以上第四節)
- ⑦ 爾余の連用諸成分にあつても、情態や分量をめぐってその僅かなものでしかないありかたを表わす。
- ⑧ 特に「かくのみ」の形を取る連用成分では、被疎外的な逼塞性を表わす。  
(以上第五節)
- ⑨ 一般の述語成分にあつては、述語の内容が僅かなものでしかないことを表わす。

⑩ 特に「かくのみ」の形を取るものでは、その持つに足らぬはかないありようを表わす。  
(以上第五節)

また、こうした検討の過程に、「収縮的単一性」の意義を特に窺わせるものとして、冒頭に記した五つの事象もまたそれぞれに観察された。即ちノミは、i ダニと組み合わせることで最低限願望を表わすのに加わり(第二節冒頭例)、ii スラと共に用いられて類推の基盤となる事象を「小」の側で用意し(第三節・(b)イ・①、第四節・(a・2)イ・①、iii 譲歩性を表わすモを従えて最善からの後退の姿勢を表わし(第一節・(a)ロ・①②、第二節・(a)イ・①②、ロ・①②③、第四節・(a・1)イ・①②)、iv カラニと共にあつて随順の土台となる事象の僅かなありさまを示し(第四節・(a・2)イ・②、(b)グループ冒頭例)、v 述語の末尾に位置して動作的事態の帯びる意味や可能性の幅を小さく限るのに働いていたのであつた(第五節・(a)イ・③④⑦)。

「袖のみ触れて寝ず」「花のみに咲きて実に成らず」のように、枢要的事項の欠如のもとに限定を表わす例の見られることも(第一節・(a)ロ・⑥⑦⑨、第三節・(a)①④、これらと軌を一にする事象であると言えよう。こうしたあり方は、やや抜ければ、「乱れ恋のみせしめつつ逢はぬ妹」のような対格成分のもの(第二節・(a・1)ニ・⑤)や、「開けも見ず隠りてのみ」のような情態修飾性のもの(第四節・(a)ロ・⑤)にも認められ、さらには「編まなくに刈りのみ刈る」のような述語分節的なもの(第五節・(a)イ・①)までをも含めることができる。極論するならば、万葉のノミにあつては、拒否的に暗指される他項全般について、そのような要素の欠如を読み取る可能性が潜んでいると考えることさえできなくはない。「収縮的単一性」の意義を想定すること自体が、そうした可能性を準備しているとも言えようからである。ただここでは、そうした関係の著しく明瞭なものに指目するにとどめる。その限りに、このような事象もまた、基本義措定の一つの拠り所となしえようかと考えられるから

である。

以上のようにして万葉のノミが「収縮的単一性」の意義を有するものであることが認められるとするならば、中古のノミへの展開の様相（以下「展相」と称する）については、どのように考えるのがよいであろうか。

中古のノミは「集中的専一性」の意義を有するものであったと考えられる（文献⑭～⑮）。これを「収縮的単一性」からの変化として眺めた場合、その集中性は、狭い範囲の中へ縮こまるかのように僅かなあり方を表わすものであったものが、収縮の果てに密度濃いあり方を帯び来ったものとして捉えることができるであろうし、専一性もまた、単一性がそれに伴って深まりを見せたものと考えられるであろう（注⑳）。

この場合、二つの基本的意義は、それぞれの時期に固有のものとして定立されている。その意味でこれらを「局時的語性」と呼ぶことも許されよう（注㉑）。それならば、二つの語性の根柢にあつてそれらをさらに統べるものとして、いわば「汎時的語性」とも称すべきものが考えられることになる。蓋し、変化するものは変化しないと言われる（注㉒）。あるものがAからBに変わると言うとき、AとBとは単なる他者であつてはならず、両者を根柢において支えるところの「共通の基体」がなければならぬ。それを上代から中古までの限りに考えるならば、「限界内閉籠性」という点に求められようかと思われる（注㉓）。ある限界内に閉じ籠もろうとする性質といったほどの意味である。この汎時的な性質が、消極性を帯びて僅少性を表わすものとして顕現するとき「収縮的単一性」の意義が生じ、より積極性を帯びてある範囲内での限りに密度濃いあり方を表わすとき「集中的専一性」の意義を現出せしめる——そんな展相の姿を想い描くことができるのではないかと考えられるわけである。

ノミの歴史の変遷については格助詞との語順の面から全体観的な考察が試みられているが（文献㉔）、右のような二段に亘る枠組みを考えることによって、外形面の観察から一歩内側に踏み込んで、内面的意義の方面に

おいてノミにどのような変化があつたのかを解明することが可能になるのではないと思われる。それは、この語の変遷をノミという助詞自身の身になって考えるということと、二つのことではない。意義の面での遷り変わりを、いわば語性内在的に了解する方途を探ろうとしているからである。そのためには、室町から江戸期にかけて生じたと目される第二の変化（注㉕）をも視野に収め得るだけの、真の汎時的語性と第三の局時的語性とが定立されねばならない。副助詞史の一角を占めるそうした問題へと進み入るためにも、語性と展相をめぐる更なる考究が要請されるであろう。

〔付記〕万葉集の本文は次の書物に依った。

・新日本古典文学大系『万葉集（一～四）』（佐竹昭広ほか 一九九  
九～二〇〇三 岩波書店）

万葉集の解釈については、次の諸書を参考した。

- ・『万葉集注釈（一～二十）』（澤瀉久孝 一九五七～一九七七 中央  
公論社）〔普及版による〕
- ・『万葉集釈注（一～十）』（伊藤博 一九九五～二〇〇〇 集英社）
- ・『万葉集 全訳注原文付』（中西進 一九八四 講談社）
- ・『万葉集全注 卷第二十』（木下正俊 一九八八 有斐閣）
- ・日本古典文学全集『万葉集3』（小島憲之ほか 一九七三 小学館）
- ・新編日本古典文学全集『万葉集③』（小島憲之ほか 一九九五 小  
学館）

これらの書物の引照に際しては、「新大系」「澤瀉注釈」「伊藤釈注」「中西進」「全注」「旧小学館」「新小学館」等々の略称を適宜用いた。

## 注

〔注①〕文献⑭⑮⑯では、成章説をこのように理解した上で、古今・蜻蛉・更級などの用例に基づきつつ、中古のノミの基本的性格を論じている。ま



た文献⑬では、バカリをめぐる成章説をも参照しながら、枕・大鏡などの用例に即して、二助詞の役割分担のあり方について検討している。そこでのノミの捉え方は、句全体に対して直接働くとは考えない点で、文献⑨⑩のそれとは異なる。

(注②) 万葉集のノミについては既に文献⑪があり、上接語句の品詞とノミのはたらく範囲との関係を考えるという観点からこの語の性格が論ぜられているが、ノミに備わる意義それ自体については、なお究明の余地が残されているのではないかと思われる。なお、文献⑫では、小柳説への批判的な吟味がなされている。

(注③) 澤瀉注釈では、末句を「忘れえなく」と訓む。訳は《その物語だけでも、手児名の名だけでも自分は忘れることが出来ないことよ》である。大意は同じだが、「忘れゆましじ」だと《忘れられそうにない》(新大系)の意となる。

(注④) 譲歩的な意味を表わす「も」については文献⑬を参照した。「一声も鳴け」の歌については《「一声」は明らかに最低限の希望である》(六〇頁)とされている。

(注⑤) 「心のみ」の云い方は対格成分の例にも見える(次節、(a)ニ・②として掲げる)

(注⑥) 「二項・他項」の用語は、文献⑭による。ここでは、限定を表わす副助詞は「二項の明指と他項の拒否的な暗指」を表わすものとされる。

(注⑦) 大伴安麻呂は次のように詠みかけてきた。

・(二・〇一〇一) 玉葛実成らぬ木にはちはやぶる神そつくといふならぬ木ごとに

表の意味は「実のならない木には神が付くと世間では言います」であるが、「しかるべき夫がいないと、神が悪いと」と皆恐れて寄りつかなくなり「よ」との諷意が籠められている。これに対して巨勢の郎女は、「他でもなくあなたの心が冷たいのでしょう」と切り返した。「誰が恋ならめ」は「不定語+め」による反語表現で、「(あなた以外の) いったい誰の恋だというのでしょうか」の意とされる。

(注⑧) 澤瀉注釈では、真淵・万葉考が原文「花耳尔保布」の「耳」を「開」の誤りと見て「花咲き匂ふ」と訓んでいるむね紹介し、《花サキにほふ》の方がおちつく」と評している。そのほうが持つて回った解釈にならないかとも思われるが、新大系の脚注に⑩の「花のみ」を参照しているのに鑑み、考え得る一つの解釈として記してみた。

(注⑨) ここで澤瀉氏(一八九〇〓明治二三〓一九六八〓昭和四三)によつて用いられている「ばかり」は、僅かなあり方を表わすと受け止めてよい

のではないかと思われる。ほぼ同世代の谷崎潤一郎(一八八六〓明治一九〓一九六五〓昭和四〇年)にあって、用言を承けて文末に位置するバカリが、そこに見られる事柄の僅かなあり方を表すのに用いられているという事象が参照されよう(文献⑮、五〇頁)。

(注⑩) 「いかさまに おもほしめせか」という言い方は、集中これ以外に三例見える。

・(〇一・〇〇二九) いかさまに 思ほしめせか あまざる 鄙にはあれど いはばしる 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ

・(二二・〇一六七) いかさまに 思ほしめせか つれもなき 真弓の岡に 宮柱 太敷きいまし

・(一三・三三二六) いかさまに 思ほしめせか つれもなき 城上の宮に 大殿を 仕へ奉りて 殿隠り 隠りいませは

第一例は大津の宮の荒れたさまを詠んだ人麻呂の長歌、第二例は草壁の皇子が亡くなられたときの人麻呂の長歌(真弓の岡に殯の宮が置かれた)、第三例は長歌形式の挽歌群の一首である。いずれも「好ましからぬ所への移動」を述べるに際してこの言い回しが用いられている。⑫の例もこれと同じ使われ方であろう。「文明の徳沢とはおよそ無縁の地であるのに」といった含みが見て取られるのではないかと思われる。

(注⑪) ダニのこのような基本的性格については、文献⑯⑰⑱で、平安時代の用例に基づいて論じている。上代のダニについても、ひとまずそうした捉え方をしておいて大過なかならうかと思われる。

(注⑫) 次の歌は、「夢のみに」の訓もあるが、澤瀉注釈では《ミタはムタの詠音》とする全釈(鴻巣盛広)の説に従うべきだとされ(一二七頁。ノミの「ミ」が乙類であることも理由の一つとして見える)、伊藤釈注・中西進などもこの訓み方になっている。

・(二〇・四三九四) 大君の命恐み弓のみた(由美乃美他) さ寝かわたらむ長けこの夜を(総索引の訓みは「弓のみに(由美乃美仁)」。「仁」の字は、西本願寺本・紀州本などに見えるむね澤瀉注釈に記す)

(注⑬) 末句は、「闇のみに見る」(伊藤釈注「闇のみに見ゆ」(澤瀉注釈・中西進・新小学館)のような訓のほかに、「闇の夜に見ゆ」(旧小学館。「耳」を「所」の誤りと見る)などの訓み方もあるが、姑く新大系に依つて考えておいた。

(注⑭) 「ヤ……ム」の詠嘆的な表現性については文献⑯⑰。

(注⑮) 石垣氏は「ばかりで」を用いて訳出している(文献⑰、一〇八頁)。氏によれば「からに」は対象への随順を表わすものであり、それはまた



外からの力を何も加えないことでもあるところから、そのような訳もなされるわけである。

(注16) 次のような例にそうしたあり方を見て取ることができよう。

・(四・〇五九九) 朝霧のおほに相見し人ゆゑに(人故尔) 命死ぬべく恋ひわたるかも

・(二・三〇〇三) 夕月夜曉闇のおほほしく見し人ゆゑに(見之人故) 恋ひわたるかも

・(一・二七四四) すぐき取る海人の灯火よそにだに見ぬ人ゆゑに(不見人故) 恋ふるこのころ

・(一・二五三四) 相思はぬ人の故にか(人之故可) あらたまの年の緒長く我が恋ひ居らむ

・(一・二三九四) 朝影に我が身はなりぬ玉かきるほのかに見えて去にし人ゆゑに(去子故)

・(一五・三七二七) 塵泥の数にもあらぬ我ゆゑに(和礼由惠尔) 思ひわぶらむ妹がかなしさ

(注17) ⑧の初句は「われのみし」の訓みもあり(澤瀉注釈など)、その場合は主格成分になるが、姑く新大系の訓み方に従っておいた。文献⑦(七四〜五頁)には「ひとりのみ」の義訓を取るのが穩当であるむね説かれている。

(注18) 初二句については、集会での禁酒令が出ているが親しい者が小人数で楽しむのは構わないとされたことを踏まえるむね、左注に記されている。

(注19) この場合、息絶えた時点で「かくのみ」と分かるのだから、「慕い来る」という生前のふるまいとの間に時間的な逆行があつて、因果関係的な流れを了解するのにやや難が生じるのではないかと見られるかも知れない。しかしここでも、「くのまにまに」といった随順性の意義を活かす道はあるかと思われる。事後の視点から見れば「かくのみ」と言うほかないようなはない命であつたのだが、生きていた時の妻は(そのようなことには思いも及ばず)ただただその命の促すままに(内なる命の声に従つて、あたかもそうするのが当然でもあるかのように)はるばると旅路とともにしてきた、その心根が(今となつては)不憫でならない……そういったふうな気味あいに解することも、できないわけではなからうからである。

(注20) 「からに」と訓む理由として次の三点が指摘されている(澤瀉注釈)。

- i ①の仮名書き例があること。
- ii 「故」の字を「から」と訓むことを支持する例があること。
- iii 「ゆゑ」が「が」以外の助詞を承ける例のないこと。

(注21) この歌でも(注19)で述べたのと同じ時間的な逆行が見られる。しかし

ここでも、①の場合と同じように考えることで、整合性を保つことができそうに思われる。生きていた当時には(はかない定めにあることなど夢にも知らず)ただただ与えられた命のまにまに未来を見据えていた……そんな気味あいを歌つたものとして理解できようからである。前注で触れた訓みの議論と関わりをせざるなら、時間的な逆行の問題についても、因果性の表立つ「ゆゑに」よりも随順性に基づく「からに」のほうが、難が少なくすむのではないかと思われる。

(注22) この種の述語ではたらく助詞をめぐるこのような理解は、文献④(一〇頁)を参考とした。

(注23) 古今巻頭歌の解釈については文献⑧(二〇一〜二頁)を参考した。

(注24) 次の正述心緒の歌のノミは訓み添えであるが、使われ方自体は③とよく似ている。

・(一・二三八二) うちひさす宮道を人は満ち行けど我が思ふ君はただひとりのみ(正一人)

(注25) 次の正述心緒の歌のノミは訓み添えであるが、使われ方自体は①とよく似ていると言えよう。

・(一・二三八三) 世の中は常かくのみと(常如) 思へどもかつて忘れずなほ恋ひにけり

(注26) もとよりこれは両端を見据えての見通しに過ぎない。より具体的な吟味は今後に委ねるほかない。

(注27) 「語性」という用語は文献⑤のそれを援用する。そこでは不定語という語類の根柢にあつてそれに一貫する性質という意味で用いられている。もとよりここでは、ノミという一つの助詞の根本的な性格を指すものとして使っているが、多様な現象を統一的に理解するためのものという基本的なあり方は変わらないものと思われる。

(注28) カント「純粹理性批判」「原則の分析論」に見る次のような文言を参考とする(「経験の類推」のうちの「A 第一の類推」B230)。

《変化する(自らを変化させる)すべてのものは常住的(傍点原訳文。以下同)であり、変化するすべてのものの状態だけが変移する。》(『カント全集4』有福孝岳訳 二〇〇一 岩波書店 二八六頁。傍点はカント原文のゲシュエルトを示すためのもの。因みに「常住的」に対応する原語は、手許のレクナム文庫では *alebend* である)

(注29) もとより、ノミがその基体だと言っただけでは足りない。そのような(上代的でも中古的でも共にありうるような)ノミとは、どのようなものであるのか問題となるからである。

(注30) 文献②③④⑤でその一端の解明を試みている。

## 参考文献

- ① 石垣謙二（一九四六・一九五五）「助詞「から」の通時的考察」『助詞の歴史的研究』（岩波書店。同書・二五五頁によれば、原論文は一九四六年に三鷹国語研究所へ研究報告として提出されたものとされる）
- ② 石田春昭（一九三九）「コソケレ形式の本義（上・下）」『国語と国文学』一六卷二・三号
- ③ 井手 至（一九六二）「紀女郎の諧謔的技巧―「戯奴」をめぐる―」『万葉』四〇号
- ④ 尾上圭介（一九八二）「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』五八卷五号
- ⑤ 尾上圭介（一九八三）「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』（明治書院）『尾上圭介（二〇〇二）『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版）所収。参照は後者による」
- ⑥ 澤瀉久孝（一九三八）「か」より「や」への推移（上・中・下）」『国語国文』八卷一・二・五号『万葉の作品と時代』（一九四一 岩波書店）所収。参照は後者による」
- ⑦ 此島正年（一九六六）『国語助詞の研究』（桜楓社）
- ⑧ 小松英雄（二〇〇四）『みそひと文字の抒情詩 古今和歌集の和歌表現を解きほぐす』（笠間書院）
- ⑨ 小柳智一（一九九七）「中古の「バカリ」と「ノミ」」『国学院雑誌』九八卷一・二号
- ⑩ 小柳智一（一九九八）「中古の「ノミ」について―存在単質性の副助詞―」『国学院雑誌』九九卷七号
- ⑪ 小柳智一（一九九九）『万葉集のノミ―史の変容―』『実践国文学』五五号
- ⑫ 阪倉篤義（一九五七）「反語について―ヤとカの違いなど―」『万葉』二二二号「文章と表現」（一九七五 角川書店）所収。参照は後者による」
- ⑬ 鈴木ひとみ（二〇〇五）『副助詞サエ（サへ）の用法とその変遷―ダニとの関連において―』『日本語学論集』一号（東京大学）
- ⑭ 田中敏生（二〇〇三）「集中的専一性における項目限定性と事態波及性―古今和歌集における副助詞ノミの意味的なたらき方をめぐって―」藤岡忠美先生喜寿記念論文集『古代中世和歌文学の研究』（和泉書院）
- ⑮ 田中敏生（二〇一一）『蜻蛉日記』の副助詞ノミ―集中的専一性の意義の諸発現―』『言語文化』九号
- ⑯ 田中敏生（二〇〇四）『更級日記』の副助詞ノミ―その項目限定性と事態波及性をめぐって―』『言語文化』一号（四国大学）

『万葉集』の副助詞ノミ―基本義（収縮の単一性）措定の試み―

- ⑰ 田中敏生（二〇〇八）『枕草子』の副助詞バカリとノミ―中古における役割分担の「確認」―』『四国大学紀要』（人文）二九号
- ⑱ 田中敏生（二〇〇七）『大鏡』の副助詞バカリとノミ―平安時代における役割分担の「確認」―』『四国大学紀要』（人文）二七号
- ⑲ 田中敏生（二〇〇七）『蜻蛉日記』における副助詞ダニの諸用法とその連関―「相対的軽少性」の意義に基づく統一的理解の試み―』『四国大学紀要』（人文）二八号
- ⑳ 田中敏生（二〇〇八）『枕草子』の副助詞ダニ―中古における「相対的軽少性」の意義の「確認」―』『四国大学紀要』（人文）三十号
- ㉑ 田中敏生（二〇〇八）『大鏡』の副助詞ダニ―平安時代における「相対的軽少性」の意義の「確認」―』『言語文化』六号
- ㉒ 田中敏生（二〇一二）『古今和歌集』の副助詞ダニ―「相対的軽少性」の意義をめぐって―』『四国大学紀要』（人文）三八号
- ㉓ 田中敏生（二〇〇四）『義経記』の副助詞バカリとノミ―限定表現における役割分担の斜陽性をめぐって―』『四国大学紀要』（人文）二二二号
- ㉔ 田中敏生（二〇〇五）『醒睡笑』の副助詞バカリとノミ―限定表現における役割分担の衰退をめぐって―』『言語文化』三三号
- ㉕ 田中敏生（二〇〇六）『洪川版「御伽草子」における副助詞バカリの限定用法―複限定の認定を中心に―』『四国大学紀要』（人文）二五五号
- ㉖ 田中敏生（二〇一一）『谷崎潤一郎「痴人の愛」の副助詞バカリとダケ―大正末期における役割分担の事例―』『四国大学紀要』（人文）三五五号
- ㉗ 鶴 久（一九六二）『万葉集の義訓をめぐって』『香椎潟』八号（福岡女子大学）
- ㉘ 中田祝夫・竹岡正夫（一九六〇）『あゆみ抄新注』（風間書房）
- ㉙ 松下大三郎（一九二八）『改撰標準日本文法』（勉誠社復刻版による）
- ㉚ 森重 敏（一九五四）『群数および程度量としての副助詞』『国語国文』二三卷二号
- ㉛ 森野 崇（一九九八）『奈良時代の係助詞「も」に関する考察』『二松学舎大学論集』四一号
- ㉜ 山田昌裕（二〇一一）『副助詞「ノミ」の変容と副助詞研究の課題』『恵泉女子学園大学紀要』二三号
- ㉝ 山田孝雄（一九三六）『日本文法学概論』（宝文館）

（田中敏生 四国大学文学部国語学研究室）